

特 217

884

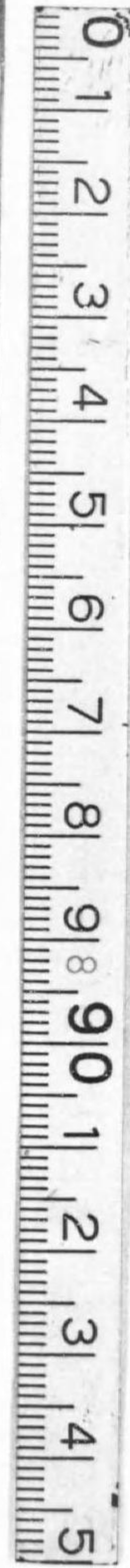
NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

經 陀 彌 阿

朗 紫 杉



院 書 方 東



始



特 217
884

阿
彌
陀
經

杉

紫

朗

目次

第一章 教興と流傳……………一

一、何が説かれてあるか……………一

二、何の爲に説かれたか……………四

三、一代經中の地位……………六

四、翻譯と註釋……………八

第二章 經題の解釋……………一〇

一、題號の種々……………一〇

二、題號の意味……………一六

三、翻譯者雜什……………一八

第三章 由序の六事……………二〇

一、一經の三分……………二〇

二、別序の有無……………二二

三、六事の意味……………二三

第四章 極樂と彌陀……………二七

一、正宗の分科……………二七

二、依正の總説……………二八

三、阿彌陀佛……………二九

四、極樂淨土……………三二

五、佛の久遠……………三五

六、淨土の無邊……………三七

第五章 極樂の莊嚴……………四一

一、極樂の名義……………四一

二、七重の欄網樹……………四五

三、七寶の蓮池と樓閣……………四七

四、天樂、金地、妙華……………五〇

五、妙鳥微風の法音……………五三

第六章 彌陀と聖衆……………五七

一、彌陀の名義……………五七

二、光壽の二德……………五九

三、及び其人民も……………六三

四、聖衆の無量……………六四

第七章 衆生の因果……………六九

一、往生後の果相……………六九

二、執持名號……………七三

三、來迎と往生……………七七

四、念佛の自他力……………七九

五、自證知見……………八一

第八章 諸佛の證護……………八四

一、六方諸佛……………八四

二、證誠の相狀……………八七

三、證誠の所由……………八九

四、護念の相狀……………九三

五、發願往生の已今當……………九三

第九章 互相讚德……………九四

第十章 末代流通……………九七

阿彌陀經綱要

杉 紫 朗

第一章 教興と流傳

一、何が説かれてあるか

『阿彌陀經』は法然上人によつて、淨土教正依經典の一と定められ、『無量壽經』、『觀無量壽經』と共に、淨土の三部經と稱せられたものであつて、其已後は勿論、それより已前に於ても、又日本だけでなく支那に於ても、阿彌陀佛を信仰し、西方淨土に生れんと願ふ者に於ては、深厚な尊崇が捧げられた經典であつた、印度のことは詳かでないが、恐らく同様であつたことと思はる、今此經典の綱要をお話するに就て、先づ教興即ち此教法が此地上に出現したことに關して、並びに此經典が、其尊崇者によつて如何に傳へられたかを先づ見ようと思ふ。

ところが、そこに先立つて此經には大體どんなことが説かれてあるかを申して置きたい、此經には念佛して阿彌陀佛の淨土へ往生すると云ふ教法が説かれてあることは、淨土の三部經中の他の二經に變りはない、けれどもその經その經には各々特色のある説明がある、此經は三部經中では最も文字の數の少ない經で小經とさへ云はれてあるが、併し説かれてあることは、却つて最も雄大なものを顯はさうとして居るやうである、此經には始めに阿彌陀佛の淨土である極樂の莊嚴と、阿彌陀佛及びその聖衆に關する説明がしてあり、次に衆生が淨土に往生した已後の果報と、其往生の

因種である念佛とが教へられ、後に六方世界にある無量の諸佛が異口同音に此教説を證説し、此教を信する者を護念し給ふことが示されてある、さうして其最後の諸佛證説と云ふことは、此經説の特色であつて、此經は此事を演説する爲にあつたものだと古へから見られてある程であるが、此諸佛證説と云ふことは、そも／＼何を語つて居るものであらうか、證明する佛と、證明さるゝ佛と、それが全く同一の世界にあることを示すものではあるまいか、若し其世界が異なるならばどうして眞實の證明ができればようか、眞實の證明は自分が自分に於てどなくてはできない、それすら透明清澄な心でなくてはできないのである、況んや他人の世界に對してできることではないからである、此證明する佛と、さるゝ佛との同一はやがて説く佛と説かるゝ佛の同一世界にあることを意味するものである、即ち説かるゝ佛の彌陀佛と、説く佛の釋迦佛と、證明する佛の六方無量の諸佛とが同一の世界にあることを示して居るものである、此の如く佛々同一の世界にあると云ふことは、これが即ち眞實の世界であり、絶對の世界、無限の世界であることを語つて居るのである、此眞實、絶對、無限の世界が或は一如と云はれ、法性と云はれ、眞如と云はれ涅槃と云はれ、本來の面目と云はるゝ、證悟の世界である、これに背くこそ迷ひであり、これに契ふことが悟りである、佛敎は畢竟此の世界に到達せしむることを目的として居るものである、其世界がかくして此に展開されてある、此意味を以て一經を見ると、阿彌陀佛を説明しては彼佛の光明は限りなく十方世界を照らし、彼佛の壽命はまた限りなく未來際に及ぶと説かれてあるのも、空間と時間との範疇がかつてはあるが、無限によつて絶對の世界であることを示して居り、彼淨土の莊嚴相を説いては、阿彌陀佛の變化であるとしてある、こゝに於ては佛身と佛土とはまた別物でない、また彼淨土の聖衆の壽命をば佛と同一であるとしてある、これはやがて光明も同一であることを示すもので、聖衆と佛とまた

別でないことを顯はして居る、かくの如きは何れも絶對無限の世界でなくては見られない光景ではあるまいか、されば此世界に至るには凡夫の有限差別の少善根を以てしうることでない、阿彌陀佛の御名を聞いて持つ念佛の一法より外にはないと示されてある、これまた絶對無限の一に歸す所以のもので、最も當然のことである、それで此經典には一貫して此絶對無限の風光が顯はされてある、これが文字少なき小經であるが、其思想は頗る雄大なものであると云ふ所以である、此絶對無限の世界は『華嚴經』が顯さんとする十重無盡の世界も、『維摩經』の不二法門も、『般若經』の空も、『法華經』の實相も此外にはないのである、眞實の宗教が示す所の法と云ふも、神と云ふも此外にあつてはならないのである。

所が此に注意すべきは大體、阿彌陀佛信仰、淨土願生の宗教の特色は相對對立の思想の上にあることである、即ち信する衆生と信ぜらるゝ佛とがあり、救ふ佛と救はるゝ衆生とがあり、厭ふべき穢土と、欣ぶべき淨土とがあることである、此經典が絶對無限の一の世界を顯示しても、此の特色を失ふて居るのでは決してない、此の特色は其の表面として殊に鮮明に畫き出されてある、即ち、これより西方に十萬億の佛土を過ぎて極樂世界があり、其土に在す佛が阿彌陀佛であり、其の淨土は微妙辭淨の世界であり、衆生は其佛の御名を持つて、佛に迎へられて往生す、釋尊はこれを眞實と説き、諸佛は眞實と證明して、護念すると、其の説何れか相對思想を守らないものでない、吾人凡夫に受けとられない説はない、唯此の相對對立の二の世界の、そのまゝの上へ絶對無限の一の世界が顯彰されてある、即ち二の世界と一の世界とが巧みに調和されてあるのが、此經であつて二の世界を以ては吾人凡夫の現實に應じ、一の世界を以ては永遠の理想を指示して居る、こゝに此經の尊高なものがあつて、此經自らが極難信法と名乗つて居る所以

もうなづかるゝのである、かやうなことが説かれてあるのが此經典である。

二、何の爲に説かれたか

此經典は何の爲に説かれたものであるかと云ふことは、經典に對しては先づ知らねばならぬことの一つであるが、併し、これは其の内容がはつきり見極められた所に、自ら分ることであつて、それまでは残して置くべき問題ではあるが、此經典内容の見當づけの爲にも、また上に内容の大體を述べた序でからしても、云つて置くことが必要でもあり、便利でもあると思ふ。

所がすべて佛教經典即ち佛陀の説法は一大事因縁の爲であつて、小問題の爲ではない、一大事因縁と云ふのは吾々が迷を轉じて悟を開くことである、上に云つた絶対無限の世界に契ふことである、佛教經典に對して若し此の事が忘れられ、見失はれたならば、それは已に佛教經典としての眞髓を取り失ふてしまつたのであるから、佛教經典を見て居るものとは云はれないことになる、これは吾々が佛教經典に對するに當つて、先づ第一に注意すべきことである、佛教經典のすべてがかやうであると、此經も無論其の一大事因縁の爲であることは云ふまでもない、それで此經の異譯である『稱讚淨土經』には佛の語に「我れ是の如き利益安樂大事因縁を觀て、誠諦の語を説く」と云ふのがあり、此經にも無論その意味はある。

其の一大事因縁をいかにして達成せしむるか、それが多數の經典に人間の個性のそれ々々へ對して説を述べられてあるが、淨土教は彌陀佛を信じ、西方淨土へ生れんと願ふことによつて達成せしめようとするのである、これが念佛

往生と云ふことであるが、三部經いづれも、其の爲に説き述べられたものであることは一樣である、其の中で此經は、其の念佛往生を如何なる方面から説き述べてあるかと云ふに、上に述べた如く、絶対無限の一角の世界を巧みに調和して、極難信の法と云はるゝ尊高さを示してある、即ち西方淨土は單に水鳥樹林が奇麗なとか美しいとか云ふことでなくして、それは彌陀佛の變化である、彌陀佛の證りの上にあるものである、つまり其の證の内容の豊富さを示すものである、これが淨土が微妙と云はれ嚴淨と云はるゝ所以である、吾等は此の世界を求めて、此の世界に至るのであるから、凡夫は轉じて聖者となるのである、又佛は光明無量であり、壽命無量であり、其の無量の無量たる所以は衆生をしてまたかくならしむ所にある、それで凡夫にして立どころに成佛することができるのである、されば衆生は其の佛を念する念佛の一法のみにして能く迷を轉じて悟を開くことができる、それを同一眞實の世界にある諸佛は等しく證誠護念する、此の如き尊高殊勝なる法なればこそ、濁惡の世界にある凡夫が掌を反すが如く、刹那に、自力修行の多くの階次を超越して悟を開くことができるのである、それは吾人凡夫の知見に於ては信じ難きの法である、信じ難きの法なればこそ、其の法は尊高殊勝にして吾人凡夫が救はるゝのである、故に信ぜざるを得ないのである、此の信じ難き尊高殊勝の法なるが故に、信ぜざるを得ないものであることを顯彰することが、此經演説の目的であつたのである、念佛往生を此の如き意味に於て、吾人が信ぜざるを得ないのであることを明かにする爲であつたのである。

所が眞宗々祖の親鸞聖人は已上の目的の外に、更に一つの目的を見出されてある、それは此經の表面には念佛の眞意義である他力に到達することができなくて、自力の善根とし佛の救ひの條件として提供するものが示されてある、

つまり此經は此の如き未達の信仰状態にあるものを洗練する一つの機關であつて、これはもと彌陀佛が四十八願中の第二十願に、此の如き者をも、遂に眞實の他力信仰に到達せしめんと願はれた、其の願意を展開して説述されたものである、此經は一面此の目的を持つて居るものであるとするのである、これは親鸞獨特の見解であつて、他に其の説を見ないものである。

三、一代經中の地位

已上の如き内容が、已上の如き目的の爲に説かれた此經は、佛一代の經中に於ては如何なる地位を占むるものであらうか、大體此の問題は其の經典を信する人と信ぜない人、即ちそれによつて其の人の信念を確立した人と、然らざる人によつて見方が異なる、これは止むを得ないことである、今は此經典を尊崇する淨土教徒の見方を擧げて見よう。

經典の説述とか成立とか云ふことは、其の根機々々に對し、其の事情々々によるのであるから一概することはできない、けれども内容の教義から類別すると、淨土教經典已外のもの、何れも淨土教經典の已前にあるべきものであるとする、それは淨土教こそ、吾等の救はるべき經典である已上は、然らざる經典は吾等をこゝに誘ふ爲めのものに外ならない、さうすれば淨土教經典は一代經の最後に位すべきものである、其の淨土教經典では『無量壽經』が最初であり、『觀無量壽經』が次ぎであり、『阿彌陀經』が最後である、これは『無量壽經』で彌陀法の根本成立が先づ明かにされ、それによつて、『觀無量壽經』で多くの機類を往生せしむることが示され、而も其の最後に於て付屬された念

佛の一法が『阿彌陀經』に來つて更に付屬されたものと見るときは此の順序が立つのである、また『無量壽經』は救ふ彌陀法其の物の眞實を説き、『觀無量壽經』は其の法に救はる、根機の眞實なるものを説いたのである、根機の眞實とは、韋提希夫人の如き弱き女人、提婆、阿闍世の如き惡人、として説いたものがそれである、これこそ救の法の眞實が、本意として救はんとするものであり、人間の赤裸なる眞實相の展開であるからである、『阿彌陀經』は、此の眞實の法が此の眞實の機を救ふことを、一切諸佛が眞實なりと證したものであるとも見らるゝ、かく見るときも此の順序となる

また親鸞聖人の一面の見方である無量壽經は彌陀佛の第十八願の展開、觀無量壽經は第十九願、阿彌陀經は第二十願の廣説されたものであつて、第十八願は眞實の他力念佛の法であり、第十九願はその眞實法から垂れ出された方便法であつて、自力修善の根機を誘ふものであり、第二十願は自力修善の根機が一轉するも尙ほ他力念佛となり得ずして、自力念佛なる變態にあるものを眞實法に誘ふ方便であるとする見方によるも此の順序となるのである。

已上のいづれにするも阿彌陀經は最後に位すべき經典である、此の中親鸞の一面の見方である、眞實方便の分ちとすることは暫く置いて、三經何れも眞實なる念佛法を説く一面に於て、『阿彌陀經』が最後の經典であるとする⁽¹⁰⁾と云ふ説が出た、一代の結經と云ふのは一代の最後終結をなす經であると云ふことで、所謂遺言に相當するものだと云ふのである、これはもと善導大師が『法事讚』⁽¹¹⁾下二に「世尊說法の時將に了らんとして慇懃に彌陀名を付屬す」と云はれた意味から出たのである、此の語は『阿彌陀經』の説法の將に終了せんとする時と云ふ意味もあるが、前後

の文意から考へると一代説法の終るときと云ふ意味もたしかに含まれて居るようである、そこからして一代結經説がなされたのであるが、淨土教徒としては單なる事實の上でなくして、罪惡の凡夫、苦惱の衆生を救済する佛陀の本意と、自己が此教にあらすば救はれない信仰の上からとして、此經はどうしても佛最後の遺教であると仰がざるを得ないのである、これを此經の説き方の上から見ると、此經は無問自説の様式をとつて、問をまたずして、長老舍利弗を呼びかけ、頗る叮嚀懇勸に説かれてある、これはどうしても、佛が與へずば措かないとした教法だと云ふことを表はしたものであり、また經の終りには、「我れ五濁惡世に於て此の難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得て（成佛したこと）一切世間の爲に此の難信の法を説くこれを甚難となす」と結んである、こゝには佛が此の世に佛として出現した本意、全く此の法を説く爲めにあつたのだと、一代の事業を結んだ意味があり、と見ゆるようである、かく見來つたとき、此經は尊い高い眞實の教法難信の教法であると云ふことと共に、これを與へなくては止まされない佛陀の大悲を書きとめたものだと云ふことが知らるゝのである。

四、翻譯と註釋

此經が印度で行はれて居たことは『智度論』九（縮、往帙一六二）に「阿彌陀佛經を誦するが故に佛の自ら來るを見る」とある記事などから、或はそれではあるまいかと充分想像され、又支那翻譯の經典から、梵本に二種類あつたことも知らるゝ、これが支那に翻譯され、日本に將來され、數多き註釋書ができ、永い間、多くの人の信念を培ふた、其の流傳の跡を探ぐることは意義あることであるが、今は其の一端として翻譯と註釋書とに就て略述する。

此經の支那翻譯は三譯あつて、其中二譯だけ現存して一譯は失はれて居る、それは左の如くである。

- 一、阿彌陀經 一卷 姚秦弘始四年（西紀四〇二）二月八日 鳩摩羅什譯（存）
- 二、小無量壽經 一卷 劉宋孝建年中（同四五四—四五六）求那跋陀羅譯（缺）
- 三、稱讚淨土佛攝受經 一卷 唐永徽元年（同六五〇）正月一日 玄奘譯（存）

已上は『開元釋教錄』四（縮、結帙四三二）、同五（同四四五）、同八（同六八九）に依つたのであるが、『大唐內典錄』三（縮、結帙二六二）同六（同九〇）同九（同二〇二）にも出て居る、これでは第一譯が五紙、第二譯が四紙、第三譯が十紙となつて居り、第二譯を宋元嘉中（西紀四二四—四五三）としてあり、第一譯が第三卷では『大無量壽經』と間違へられて其の第五譯とされて居るが、これは『歷代三寶紀』八（致帙六 五六）の記事を套襲した誤りである、靜泰の『衆經目錄』二（結帙二一三）にも第一譯が五紙、第二譯が四紙として擧げられてある、第一譯の名は早く『出三藏記集』二（結帙一 九丁）にも見えて居る、所が第二譯が失はれて二存一缺となつたことは『開元釋教錄』十二（結四一〇二）同十四（結帙五 三丁）に見えて居るから、早いことであつた、善導の『觀念法門』^{（一）}九丁には四紙阿彌陀經の名が見え同^{（二）}には其の引用文もあるが、これが果して第二譯であるか、第一譯の取意の文であるか明かでない、尤もその一部が『抜一切業障根本得生淨土神呪』^{（地帙、一二）}として残つて居る、また『阿彌陀根本秘密神呪經』^{（卅三）}三ノ三なるものがあるが、これは第一譯へ第二譯の淨土神呪を加へたもので、曹魏菩提流支の譯とはなつて居るが、後人の偽作であらう、また襄陽の石經と云ふものがある、これは支那襄陽（湖北省）にあつた石刻の經で、第一譯の中ば（若七日一心不亂）と云ふ下に「專持名號、以稱名故、諸罪消滅、即是多善根福德因緣」と云ふ二十一字

10
が加はつて居るだけであるから、其の異本と云ふべきものであらう、此經の事は『龍舒淨土文』(淨土宗全書六八四頁)に始めて見え、其の石經であるか、模刻であるか、鎌倉時代の初めに我國へ送られて、現に筑前宗像神社に保存されて國寶となつて居る。

所が梵本は我國へ因縁厚かつたと見え、早く平安朝の初めに圓仁などによつて將來され、徳川時代に常明、飲光、法護の諸師によつて刊行せられた、内容は第一譯と大體に一致して居る、近時マックス・ミュラー博士によつて英譯され、東方聖書の中に收められてある、又南條文雄、榎亮三郎、萩原雲來の諸博士は各々和譯され、南條博士は「樂有莊嚴經」、又は「極樂莊嚴と名づくる大乘經」とし、榎博士は亦「極樂莊嚴と稱する大乘經」とし、萩原博士は「樂有莊嚴と名づくる大乘經」と題せられてある、又阿滿得壽氏は梵文を『悉曇阿彌陀經』として刊行せられた。

また此經は西藏にも翻譯されてある、寺本婉雅氏は此西藏譯から和譯されて、「聖樂有の莊嚴と名づけらるゝ大乘經」と題せられてある。

已上の如く梵本なり譯本なりは種々あるが、今講述しようとするのは、古來最も多く依用され、淨土教正依經典の一とされてある、羅什譯に就いてある。

羅什譯の『阿彌陀經』及び玄奘譯の『稱讚淨土經』の註釋書は支那、日本に於てかなり多數にある、其中後世多く用ひらるゝ主なものは

阿彌陀經義記 一卷 (隋)智顛
阿彌陀經疏 一卷 (唐)窺基

阿彌陀經通贊疏 三卷 (唐)窺基
阿彌陀經疏 一卷 (唐)元曉
阿彌陀經義疏並聞持記 三卷 (宋)元照、戒度
阿彌陀經疏 一卷 (宋)智圓
阿彌陀經疏鈔 四卷 (明)祿宏
阿彌陀經要解 一卷 (明)智旭
阿彌陀經略記 一卷 (日本)源信
阿彌陀經私記 一卷 (日本)源空

已上の如きものである、また善導の法事讃は阿彌陀讀誦の法式を示したものであるが、節々に讃文が加へてあつて、其の所見を見ることができ、日本に於て源空門流の淨土教各派に於ては更に多くの註釋書があつて、各々自家獨特の義が述べられてあるが、主なるものを列ねると

小經直談要註記 八卷 (鎌西)聖聰
阿彌陀經隨聞記 二卷 (同)敬首
阿彌陀經隨聞講錄 一卷 (同)義山
阿彌陀經講說 五卷 (同)法洲
阿彌陀經私集鈔 三卷 (西山)堯慧

阿彌陀經直解	三卷	(同)貞準
阿彌陀經義要	四卷	(真宗)惠空
阿彌陀經聖淨決	二卷	(同)法霖
阿彌陀經弊籌錄	二卷	(同)慧鑑
阿彌陀經略讚	二卷	(同)慧然
阿彌陀經陳善錄	一卷	(同)僧撰
阿彌陀經展持鈔	九卷	(同)智運
阿彌陀經講表	八卷	(同)深勵
阿彌陀經甲午記	二卷	(同)慧雲

此の外近時の著述で参考すべきものは、無論少なからずあるが今はこれを略す。

更に方面の異つたものに大字純の『修刪阿彌陀經』がある、これは文章の上から翻譯文が漢文としてまづいと云ふので修刪したのである、これに對して履善(真宗)は『修刪阿彌陀經』二卷、『非修刪阿彌陀經』一卷を著はして經意を失ひ、文字を濫ることを痛責して居る。

已上で其の流傳の一斑と研究の参考とを知つて頂きたい。

【註】(一) 證誠、誠實の説なりと證明すること

(二) 古へから、法然の小經釋(漢語燈三、一三丁)來意とは凡そ佛の所説に於て信不信の者あり、今經の所説に於ても亦信不

信あり、若し前の所説の念佛往生の法に於て、敬信を生じて疑無き者には何ぞ證誠を用ひん、今此の大方諸佛の證誠、偏へに疑惑不信の者の爲なり」とあり、親鸞の彌陀經和讃に「十方恒沙の諸佛は極難信ののりをととき、五濁惡世のためにとて證誠護念せしめたり」とある如き。

- (三) 一如、一は絶対唯一、如は如同如常で、絶対界の平等であり無差別であり、普遍、永遠なものであることを顯はす語。
- (四) 法性、諸法の體性で絶対眞如の法は森羅の諸法の體性であることを云ふ語
- (五) 眞如、眞實、如常で絶対一如の法は、眞實であり、不變のものであるから云ふ。
- (六) 涅槃、梵語 *nirvāṇa* 普通譯して滅度と云ふ、迷界の因果を滅亡し超度した世界の意。
- (七) 本來の面目、禪宗に用ゆる悟の世界を顯はす法、悟は今悟るのではなくて人に本來所有する眞實の面目であるから云ふ。
- (八) 『教行信證』化身土卷本丁に「至心迴向之願、不定聚獲、難思往生、阿彌陀經之意也」と云へる如きがこれである。
- (九) 親鸞聖人は『教行信證』などに於て、第十九願意に本づき『觀無量壽經』の表面に説かれた教義を要門と稱し、第二十願意に本づき『阿彌陀經』の表面に説かれたものを眞門と稱し、共に第十八願意が其まゝに説きのべられた『無量壽經』の弘願の法門に引き入るゝ爲の方便教とせられた。
- (一〇) 證空上人(淨土宗西山派祖)の『選擇集密要決』(西山全書二、二六九頁)に「阿彌陀經は一代の終也」とあり、『選擇集私集鈔』(西山派覺慧著)には「此經(阿彌陀經)を名號附屬教と得て(中略)一代の終り一代の結經と云ふべし、智證大師の經に云く、「八萬法藏妙肝心、一代聖教之結經、出離生死最要門、彌陀來迎得往生」と云ひ、覺如(真宗)の『口傳鈔』(真宗法要五丁)に「阿彌陀經」について「一代の説教むしろをまきし肝要いまの彌陀の名額をもて附屬流通の本意とする條文にありてみつべし」とある如き其説である。
- (一一) 真宗の七祖聖教所收の書は便宜上西本願寺版小本の丁数を擧ぐ

第二章 經題の解釋

一、題號の種々

此經は『佛說阿彌陀經』と題號がつけられ、『阿彌陀經』と略稱されてあるが、極古ごくいところや、經の本文や、異譯や、梵本などから見ると、必ずこうと定まつたものでなく、種々の題號が見られる、『出三藏記集』三(結帙一九丁)、
 『歷代三寶記』八(致帙六五右)には「無量壽經一卷、或云阿彌陀經」とあるから、無量壽經が本名であつたように思はるゝ、
 『淨泰の』衆經目錄』(結帙二丁左)には無量壽佛經となつて居り、『大唐内典錄』三も同じであるから、此名もあつたようである、また『開元釋教錄』四(結帙四丁左)には「阿彌陀一卷、亦名無量壽經」とあるから、阿彌陀經が本名となつて居る、これはもと無量壽經又は無量壽佛經とも題せられてあつたものもあり、そうも呼ばれて居つたのであらうが、一方大無量壽經の康僧鎧譯や、竺法護譯がまた無量壽經と呼ばれてあるのと紛るゝから、自然一方が無量壽經となり、一方が阿彌陀經となつたのであらう、第二譯の求那跋陀羅譯は小無量壽經と、小の字で簡ばれてあるようである、所が此の經の本文には「稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし」と繰り返され、「何が故ぞ名づけて一切諸佛所護念經とする」とあるから、かように名づくべきものであらうこれが略して「護念經」と呼ばれる、これと意味の近いものは唐譯の題號である『稱讚淨土佛攝受經』である、これは『稱讚淨土經』又は『稱讚經』と略稱される、所がまた本文では「稱讚不可思議佛土功德一切諸佛攝受法門」と云はれてある、現存の梵本には經の末尾に題號があつて「スクハーバティビニューホ、ナーマ、マハーヤーナストラ」(Sukhāvayīho Nāma Mahāyāna-stotra)となつて

をつて、古から『極樂具足莊嚴經』とか『極樂莊嚴經』とか譯され、近時『樂有莊嚴經』とか『極樂莊嚴と名づくる大乘經』とか『樂有莊嚴と名づくる大乘經』とか譯されてある、已上の外に『小經』と云ふ略稱があり、『四紙阿彌陀經』とも呼ばれてある、それで異譯まで數へると要するに左の通りの名稱があることになる。

- 一、佛說阿彌陀經、(略稱、阿彌陀經、四紙阿彌陀經)
- 二、無量壽經
- 三、無量壽佛經
- 四、小無量壽經
- 五、稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經(略稱、護念經)
- 六、稱讚淨土佛攝受經(略稱、稱讚淨土經、稱讚經)
- 七、稱讚不可思議佛土功德一切諸佛攝受法門
- 八、極樂具足莊嚴經
- 九、極樂莊嚴經
- 一〇、樂有莊嚴經
- 一一、極樂莊嚴と稱する大乘經
- 一二、樂有莊嚴と名づくる大乘經
- 一三、小經

二、題號の意味

『佛説阿彌陀經』と云ふのは、佛、阿彌陀を説き給ふ經と云ふことで、釋迦佛が、阿彌陀佛のことを説示された經典であると云ふだけの意味であるが、玄奘譯や、梵本の經典と合せ考へて見ると、此經題には多くの意味が含まれて居ると考へねばならぬ、大體此經題は翻譯者雜什に置かれたものと考ふべきではあるが、古への經錄に一定して居ない所を見ると、確かにそう置かれてあるとも限られない、併し、それは阿彌陀と無量壽のことであるから、原語と譯名との違ひで、どちらにしても佛を指して居る、所が現存の梵本は極樂莊嚴とか樂有莊嚴とか譯されて、これは其阿彌陀佛の在す淨土のことである、若し羅什の用ひた原本も今のもと同じであつたと考へると、羅什はなぜに佛名を以て呼ぶことにしたのであるかと云ふ問題が起る、古くは阿彌陀佛莊嚴功德經と題する梵本があつたのであろうと考へた説もあるが、斷定はできない、所が玄奘譯の方は稱讚淨土であるから、意味に於ては梵本と一致する、又此經の本文にある、稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經とあるのは玄奘譯の本文に稱讚不可思議佛土功德一切諸佛攝受法門とあるのと大體趣きが同じであるが、此經に阿彌陀佛不可思議功德の語があるから、不可思議功德の上に阿彌陀佛と置くものであろう、また玄奘譯の方にはそこが無量壽佛無量無邊不可思議佛土功德となつて居るから、やはり無量壽佛と加へてよいのであろう、そうするとつまり、此經の詳しい題は稱讚阿彌陀佛不可思議佛土功德一切諸佛所護念經とでもしたならば、多くの經題の意味が皆含まれることとなるのであろう、そうすると此經は阿彌陀佛の不可思議の功德なり其淨土の不可思議功德なりを釋迦佛が稱揚し讚歎せられ、一切諸佛たちは其事を一切衆生が信ずるよう

に證誠せられ、信じた者を擁護せらるゝことが説き示されてある、佛陀の經典であると云ふ意味となるのである、其不可思議功德と云ふのは一經の所説が悉く其内容の展開である、又護念と云ふのは玄奘譯で攝受となつて居るので、諸佛が衆生を思念の中に攝め入れて護ることである、其護る始めは證誠することであり、終りは擁護することである、此事を示すのは此經の主要なる目的となつて居るものである、所がすべて題號は簡略が尊ばれるから、梵本からして其一部について名づけられたものであろう、それが今佛説阿彌陀經となつた所では、佛説と經とは佛陀の説きたもうた經典と云ふことで諸經に通じたことであつて、阿彌陀の三字が此經の特別な題となるが、これは此經説の主體の佛を指したもので而も他の意味が自ら收まる、それは淨土と云ふも畢竟此佛の證りの徳相の一つであつて、其功德より別のものでないから、佛に收まり不可思議功德と云ふことも云ふまでもなく、徳相であるから佛の體に收まり、また阿彌陀と云ふ佛の名にこもつた意義に外ならぬから、其名にこもると云ふことができる、稱讚は讚める語であるから、讚めらるゝものゝ影に外ならぬので、讚めらるゝ阿彌陀佛に收まり、又佛説の二字も稱讚の外はないのである、一切諸佛に護念せらるゝと云ふことは、阿彌陀佛が根本であつて、其衆生濟度の作用が、諸佛に顯はれたのであつて、よくこの事ができるのであるから、諸佛は枝末である、それで根本の中に枝末は收めらるゝとも云はれ、また畢竟阿彌陀佛の作用であるから、作用を本體に收めたともいはるゝ、要するに阿彌陀佛を擧げるならば、他の意味は自ら籠つてあるから、經題として完全であつて、古來から題は一部の總標と云ふことの通りになつて居るものと云ふことができる。

その阿彌陀と云ふ佛名は、梵語にアミタブハー(Amitābha)と、アミターユス(Amitāyus)とかあつて前者は無量光、

後者は無量壽と譯される、即ち限りなき光明と、限りなき壽命の所有者であるから、此名がある、其限りなき徳はただ光りと命とだけではあるまい、一切がそうであろうが此二つは特に重要にして、且つ一切を收めることができよう此名の意義は更に後に本文に説明されてあるから、そこで明かになる、所が今此經題が譯名の無量壽の方でなくて、原語の阿彌陀のまゝであることは、上に云つた如く一つは大無量壽經に簡ばれたものであるが、また經の本文からも此方が便宜である理由がある、それは本文に、此經を證明する、諸佛の一に西方の無量壽佛と云ふのがあるから、これとも自ら分ちがつき、また阿彌陀なる佛名の意義を無量光と、無量壽との二意で説明がしてある、それに若しも無量壽のみの意味しかない譯名であると、此二意が説明しにくくなるから、原語の兩方共に含んで居るまゝの名の方が都合がよい、かような事から阿彌陀經と専ら呼ばれたのであろう。

更に思ふに大無量壽經にしても、此阿彌陀經にしても、阿彌陀佛の衆生救済の功徳を説明されたものであるが、其阿彌陀佛が衆生の前に救済の形を示現することは、其御名に於てある、即ち南無阿彌陀佛の御名である、此御名には佛のすべてが收められてあつて、衆生はこれによつて佛に觸れ、佛を抱き、佛に抱かるゝのである、そこで阿彌陀佛の功徳の説明は衆生の前には御名の説明の外はない、これが佛の名號を以て經の體とする^(三)と云はれてある所以であるそれで經題の無量壽とか阿彌陀とか云ふことは畢竟佛の御名であつて、此經も南無阿彌陀佛の御名の説かれた經であると窺ふことができる。

已上の外に四紙阿彌陀經と云ふのは善導の『觀念法門』に見へ居る名で、紙数が四枚である阿彌陀經と云ふことであるがこれは求那跋陀羅譯が經錄に四紙となつてあるから、其れではあるまいかと思はれるが、羅什譯が、善導の用ひられたのは四紙であつたやうと考へて居る人もある、小經と云ふのは文字の数の多い大無量壽經に對して、文字の数が少い經であるから云つたのであろう、決して内容の劣つて居ると云ふ意味ではない。

二、翻譯者羅什

此經の最初に翻譯者の名が「姚秦三藏法師鳩摩羅什、詔を奉じて譯す」と明記されており、多くの經錄にも異論のない所であるから、間違はない、其翻譯者鳩摩羅什(Kumarajiva)は、支那の五胡十六國の一である後秦、即ち姚氏の秦の弘始四年(西紀四〇二)に此經を譯した、そうして羅什は、經律論の三藏に通達した法師であるから、姚秦三藏法師とあるのである、其詳傳は今略するが、祖先は印度の人であつて、西域、龜茲(Kucha)に生れ、早く出家して印度にも遊び、佛典の研究に努めた、前秦符堅に迎へられたが、未だ至らないうちに符堅が害せられたから、後に後秦の姚萇に迎へられ、其子の姚興の弘始三年十二月に長安に入つて、興の後援で盛に經典を翻譯した、『妙法蓮華經』『維摩詰所說經』『小品般若經』『仁王般若經』『首楞嚴三昧經』『智度論』『中論』『十住毘婆沙論』など現に日本人の精神生活の糧とせられて居るものが頗る多い、羅什の翻譯は其義に於ても、其譯語の流暢なことに於ても其妙を極めたものである、今此經が此翻譯者の手によつて支那、日本に傳へられて、現に吾人が日夕拜讀して頂いて、信念を培ふことのできるのには、一に佛徳の顯現であるが、また什師の恩恵も深く念はねばならぬことである。

【註】(一)『出三藏記集』二(結一六丁)『歷代三寶紀』五(致六三五)同六(同丁右)『大唐內典錄』二(結二四二)『開元釋教錄』一(結四九丁)同十一(同九五)等

第三章 由序の六事

一、一經の三分

經典の文段を分つに、古來先づ三段に分つことが用ひられてある、三段と云ふのは序分、正宗分、流通分である、^(一)序分と云ふのは由序の部分と云ふことで、由序といふのは此經説の由で起るべき事情因縁である、正宗分と云ふのは一經の主要部分で、此經の主體たるべき經説を云ふのであり、流通分とは、其經説を遠く末代に流通し蒙らしむべきよりの説示を云ふのである、かように文段を分つて見ることは最も穩當であり適切であるから、註釋家はこれに依つて居るのである、今此經の三分は「是の如く我れ聞く」から「無量の諸天大衆と俱なりき」と云ふまでが序分、「爾の時、佛、長老舍利弗に告げたまはく」から、經の末尾の「此の難信の法を説く、是を甚難となす」までが正宗分、「佛、此經を説き已りたまふに」から終りまでが流通分である、此分ち方は早くは智顛の『阿彌陀經義記』窺基の『阿彌陀經通贊疏』になされた説で源信の『阿彌陀經略記』源空の『阿彌陀經釋』に用ひられてある、所がこれに就て古來異説がなかつた譯ではない、智圓の『阿彌陀經疏』には「舍利弗我今阿彌陀佛の不可思議功徳を讃歎するが如く」から已下、即ち六方諸佛が證誠することの説かれてある部分已下を流通分として居り、智旭の『阿彌陀經要解』もまたそ

うして居る、且つ智旭は序分を今よりも下げて「阿彌陀と號す、今現に在して説法したまへり」までとして居る、又大佑の『阿彌陀經略解』には流通分を諸佛證誠の説き終られた、次の節の「是の故に舍利弗、汝等皆當きに我が語及び諸佛の所説を信受すべし」已下とされてあり、又慈藏の『阿彌陀經記』には、其れより尙ほ下の節の「舍利弗、我今者、諸佛の不可思議功徳を稱讚するが如く」から下を流通分とされて居る、流通分に就いて此の如く見解が分れるのは、大體諸佛が證誠すると云ふことは、此經説を廣く普及さす爲にあるのであるから、それこそ流通であると考へられたからである、併しこれは此經としては妥當でない、それは此經は上に已に述べた如く、一切諸佛が此法を證誠し護念すると云ふことを顯はすのが主要目的である、それでこそ此經自ら經題を呼んでは「稱讚不可思議功徳一切諸佛所護念經」と云ひ、唐譯には「稱讚淨土佛攝受經」と呼ばれて居る稱讚すること、それを一切諸佛が同じくすることは、此經に於てこそ説き述べられてある特色である、此主要部分を正宗と見ないと云ふことゝなるからである、大佑や慈藏の説にしても諸佛の證誠に就て、釋迦が自分が今諸佛のことを説き讃歎するが如く、諸佛も我が徳を讃歎すると、互に其徳を讃じた部分、これは諸佛の證誠と離すべからざる關係のものを、切り離すことゝなり又此經説の行はるべき世界、即ち此經説を受くべき相手の根機と云ふべき五濁惡世のことは經末に説かれてあるのも此經説としては主要部分に置かなければならぬのが、また切り離さるゝ事になるから、それ等の説も穩かでないようであるから用ひられない。

序分に就て智旭の説は異つて居るが、智旭が序分にいた一節は、次ぎに廣く説く淨土の佛と國土とに就て略説したのであつて、それを更らに廣説するのであるから、共に正宗分であるべきものであつて、序分に見るのはまた穩や

かでない、それでやはり、多くの人が用ひられてある、上の分ち方が、最も穩當であるから、今は之に従ふ。」

二、別序の有無

此經の序文には左の六事の成就だけが記されてある。

如是……………信成就
我聞……………聞成就
一時……………時成就
佛……………主成就
在舍衛國(中略)獨園……………處成就
與大比(中略)大衆俱……………衆成就

即ち此經典の編輯者が確かに是の如く聞いたと云ふことを表する、信と聞と、此經の説かれた時と、説きたまひしは佛であること、説かれし場所と、其時佛と俱に在つて聞くことを得た大衆との六つの事であるが、これは諸經の多くに同じ形式に置かれてあることであつて、通じての序文であるから通序と呼ばれてある、所が諸經にはまた多く此通序に對して別序と呼ばれる、其經のみの由序因縁が説かれてある部分がある、『大無量壽經』であると、其場合に佛が諸根悅豫、光顏巍巍とましくしたのを阿難が見奉つて、何の爲めであるかを問ひ奉つた如きである、所が此經にはそれは無いのであらうか、これに就て有無の見解が分れて居る、上にあげた智旭の説の如きは有るとして正宗分に屬

すべき部分をそれとした、これは穩かでない、また智圓の疏には大衆の集つて來たのは聞法の爲めである、それで唐譯に「聞法の爲の故に俱に來つて會に坐す」と説かれてある、此に自ら今の説法を引き起す、此經特別の由序因縁の義があるとして居る、所が元照の『阿彌陀經義疏』には、此經に別序はない、別序は此經説を引き起す爲めに、何等かのことに就て、問を發するのであるが、此經は問のない、無問自説の形式が取られてあるから、其問のないのが當然である、問なくして説く、無問自説の形式には二つの理由がある、一には他方淨土の話しであるから、此經説の正しき相手である舍利弗の如き小乗徒の知るべき所でないから、二には佛の大慈悲、衆生を憫みたまふに、其求めるを俟ちたまはずして、與へたまふからであると、其他種々な説がなされてあるが、大體には元照のやうに考へることは、頗る趣き深い尊いことであると思ふ、無問自説の形式を取るの經、獨り此經のみではあるまいか、此經は佛、五濁惡世を憫みたまふ、遣るせなき大悲より説き出されたものであるから、これを無問自説に就て味ひ、特に此經説を發起すべき別序なきに就てこれを味ふことが尤もであつて、慥かに佛の御旨に違しないことだと思ふ。

三、六事の意味

諸の經典の最初に此六事を置いて序文とすることは、佛の遺命によることであつて、此經説の正確にして信すべきものであることを、證明する爲であると、古來から傳へられて、證信序と云ふ名で呼ばれてゐる程、諸經に通じたことであるから珍らしいことではない、併し此經の六事は此經の六事であつて他經の六事ではない、此經説の内容として、全體に有機的關係を持たされてあるものと見たとき、また特別な意味がでくると思ふ、それを少し味ふて見や

先づ如是の二字は、「是の如し」と承認したことであるから、此經を傳へた人の信の成立を彰して居る語である、所が龍樹の『大智度論』一には『般若經』の如是の文字を解釋して、「佛法の大海には信を以て能入と爲す」と云ふ語があつて、曇鸞の『往生論註』の末尾には、此意味を承けて「經の始に如是と稱することは、信を彰はして能入となす」と云はれてある、それからして文字まで如は如實である、是は是正であるとか解釋されて、此文で此法こそ眞實にして謬りなき法であると信認して居る意味が顯はさるゝやうになつた、考へると、經の始めに此語が置かれ、此の如く解釋されたこと云ふことは、佛教としては非常に尊い意味深いことである、大體佛教經典には藝術味もあれば哲學味もある、所が何があつても大體が宗教であつて、信によつて成立して居るものだと云ふことが示されて居るのである、それで經説が如何に藝術的であつても單なる藝術ではない、如何に哲學的であつても單なる哲學ではない、それは神聖にして尊嚴な、宗教的信念の對象としてあるものだ云ふことを明かにして居る、それで若しも信がなかつたならば此經説の大海をば一滴も汲み取ることはできないのであつて、經典其物も存在しないのである、此意味に於て經の始めの如是の文字は非常に尊い、所が此阿彌陀佛一語は、要するに阿彌陀佛を説いたのである。

それで此經を信ずると云へば阿彌陀佛を信ずるのであつて、其信は即ち南無であるから、南無阿彌陀佛と云ふこととなる、眞宗の法(四)霖は如の字は南無であり、是の字は阿彌陀佛であると云ひ、又如是は南無であり、已下の經説は阿彌陀佛であつて、一經要するに南無阿彌陀佛の名號であると説明してをらるゝ、これは後に専ら名號を持つことが教へられてある此經としては尤もな解釋であつて、かく解釋し來ると如是は阿彌陀佛へ對する純全な信念であつて、そ

れは一切衆生が悉く起して、我永遠の生命を獲得せねばならぬもの、即ち人生に於ける必要第一なもの云はねばならぬのである。

次に我聞は「我れ聞く」と云ふので聞きたることの成立であるから聞成就である、善導は『觀經』の我聞の語を解釋して「阿難は是れ佛の侍者なれば、常に佛後に隨ひ、多く聞き廣く識り、身座下に臨み、能く聽き能く持ち、教旨親しく承くることを明して、傳説の錯りなきことを表せんと欲す、故に我聞と曰ふなり」と云はれてあるが、また同じ意味である、所が此經は佛の名號を持つ經であるとなると、此聞くと云ふのも、大無量壽經に「其名號を聞いて信心歡喜す」とある聞と同意味となつて、單に聞くのではなくて聞いて持ち信心歡喜する、うるはしい信念が此文字の上にも顯はされてある、此の如くして如是我聞の四字は一經の始めにあつて宗教的光彩と、御名による信仰の感味とを豊かに表詮して居るのである。

さうして其經説は一時即ち或時、佛が舍衛國の祇園精舍に於て、長老舍利弗、大目犍連、乃至阿菟樓駄等千二百五十人の大比丘衆、文殊師利、阿逸多(彌勒のこと)等の大菩薩及び釋提桓因(帝釋天のこと)等の諸天、人間其他の大衆の集りに對しなされた、此事が時、主、處、衆の四事の成立である、この中、主成就に於て此經説が佛の説法であると云ふことは、『大智度論』二に諸經の起説に五種がある、それは佛自口の説、佛弟子の説、仙人の説、諸天の説、化人の説であつて、いづれも佛意を承けて説くのではあるが、佛自らの説とされた所は、特に尊さと親しさと確かさを顯はされて居る、また處成就の祇園給孤獨園は略して祇園であつて、その精舍に於てあるが、祇園は其園の樹木の所有者が祇陀太子であり、土地の所有者が給孤獨長者即ち須達長者であつたからかく呼ばれるのであるが、給孤獨

は神氏譯には「怙恃なきものに博飯を給する人と稱せられし須達長者」とされてあるが、これは偶然かも知れないが祇樹は尊高を表し、給孤獨は慈悲を表して居るようで、此經の説き場所としては實に相應しいようである、佛は此場所に於て、大比丘、大菩薩、諸天、人間其他の大衆に圍繞せられ、徐ろに説法の口を開かれたのである。

そうして其説法は佛自ら長老舍利弗を呼びかけられた、長老は尊者とも云はれて、徳の高い人のことで、これは今集つて居る諸大弟子に通ずる名であらうが、舍利弗は其中に於ても最長老で、特に智慧第一と呼ばれて居る人である彼れを佛自ら呼びかけ呼びかけて一經中更に彼れの間を發せしめてないのは、此法や實に尊嚴、深秘、難信にして、佛已下の者の窺ひ知る所にあらざることを表はし、而も彼れに告ぐるは彼れ一人に告ぐるのではない、一切衆生に告ぐるのである、善導は「釋迦如來、身子(舍利弗のこと)に告ぐるは、即ち是れ普く苦の衆生に告ぐるなり」と味はれた、こゝには釋尊の溢るゝ大慈悲が躍動し、其大慈悲はやがて阿陀彌佛の大慈悲であつて、こゝにも尊嚴と慈愛との顯現を見るのである。

〔註〕(一)東晉の道安に始まると云ふ

(二)西譽の『小經直談要註記』(淨全本十三卷三〇)所引に依る

(三)『智度論』三(往一丁二右)

(四)『阿彌陀經聖淨決』上二一、下三〇に見ゆ

(五)『觀經疏序分義』二

(六)『法事讚』下十一

第四章 極樂と彌陀

一、正宗の分科

一經の正説たる正宗分の文字の上には、何事が述べられてあるかと云ふことは、其文字の科節段落を分つことに於て大體知らるゝのであるから、今正宗分の話をしよとすると先に立つて一往、それを述べて置かう。

古來の註釋家に二大段乃至六大段とする説がある、其二大段に分つ説は智顛の『阿彌陀經義記』、源信の『阿彌陀經略記』源空の『阿彌陀經釋』がそうであつて、源空では第一段を「極樂依正」とし第二段を「念佛往生」としてある、第二段は「舍利弗、衆生聞かん者はまさに發願して」云云已下である、三段とするものは、元曉の『阿彌陀經疏』や、元照の『阿彌陀經義疏』などで、近代の學匠には彌陀依正、衆生因果、諸佛證誠とされてある、四段とするものは、株宏の『阿彌陀經疏鈔』などの説であり、五段とするものは慧鑑の『阿彌陀經弊等錄』であり、六段とするものは親基の『阿彌陀經疏』や『同通贊疏』の説である、四、五、六段とする説は何れも諸佛の證誠が説かれてある後に、諸佛の護念のことや、釋迦と諸佛とが互に其徳を讚歎することなどが説かれてある部分が大段落と見られたので、それ／＼理由はあるが、三段とするのが最も分り易いようであるから、それに從ふて置く、三段といふのは先づ初めに彌陀の依正を明す、それは淨土の莊嚴相、即ち依報の功徳と、佛や聖衆即ち正報の功徳とを説き、次に「又舍利弗極樂國土には衆生生ずる者は」から已下は衆生の因果を明す、衆生の因果とは衆生が念佛を修して淨土に往生することである、後に「舍利弗我いま阿彌陀佛の不可思議功徳を讚歎するが如く」已下は諸佛の證誠を明す、諸佛が上來の釋迦

の所説を眞實なりと證明せらるゝのである、四五六段とせらるゝ説の第四段已下は諸佛の護念や、釋迦諸佛五に其徳を讃する如きは、いづれも諸佛の證誠に屬すべきものであるから別の段落とする必要はなく、また二段とする説は諸佛の證誠が、此經の目的とする所の衆生をして念佛往生せしめようとする點に専らかゝつて、其事の眞實を鮮かにして居る點は頗る結構である、源空が二段説であつたことは尤もである、所が諸佛の證誠は念佛往生だけにかゝるものでなくて、實は極樂の依正にもかゝるもので、極樂の依正の説も眞實であると證明さるべきであらうし、又諸佛證誠と云ふことは此經典の特色であるから、これは大段落の中に一段を占むる方が、特色が知れてよいようである、それでは其三段として、此經は此三部分から成立して居るものと見て置くこととする。

一、依正の總説

正宗分最初の一大段である彌陀の依正を明す中に、先づ其依報正報を總説してある一節がある。
是より西方、十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名けて、極樂と曰ふ、其土に佛まします、阿彌陀と號す、今現に在して説法したまふ。

とこれである、極樂とは國土であつて佛や衆衆が依り用ゆる果報であるから依報であり、阿彌陀佛は佛の果報の主體であるから正報である、佛の果報の全體は此依正二報で盡きる、これが淨土教の起り來る本源であつて、淨土にまします佛は淨土教に於ける信仰の對象であり、佛の在す淨土は淨土教徒の往生せんとする目的である、此經に先づ、彌陀の依正を示されたのは、これが爲であつて、其詳しい説明の爲に、先づ其全體をこゝに總略してかゝげ出されたのである、それでこゝで阿彌陀佛と淨土とのことに就て大體説明しておこうと思ふ。

二、阿彌陀佛

西方淨土に現に在して説法せられつゝある佛である、其佛は後の經説によると、阿彌陀佛成佛より已來、今に於て十劫なり。

とあるから、十劫已前に成道された佛である、其成道に就ての始末、即ち因果の始終の物語は『大無量壽經』に詳しく説かれてある、大體に此經は『大無量壽經』を前提として居るものであるから、彼經と別にしては考へられないものである、彼經の説によると、過去久遠無量劫の錠光如來より、五十三佛出世して其最後の世自在王如來出世の時、國王あり、發心出家して法藏菩薩と稱したが、一切の恐懼を大安となし、諸の衆生の生死勤苦の根本を抜かん^(一)望み思惟すること五劫、遂に四十八の大誓願を立て、必ず無上道に至り、大施主となつて、諸の貧しく苦しむものを濟はん、其爲に其名は十方世界に聞こえざる所なからんことを願ふた、かくして其願を成就する爲に、兆載永劫が間佛道を修した、而して望むが如く其願は成就して、今より十劫の已前に、其淨土をば西方、十萬億の佛土を過ぎた所に建設し、其土に於て正覺を唱へて阿彌陀佛となつた、其淨土は清淨にして無量の莊嚴が充満し、佛は常に説法し、舊住と新任との菩薩は佛を供養し、衆生を度するの聖業に勤めて居るとせられてある。

思ふに此物語に一貫して居る精神は、佛の衆生救済と云ふことである、即ち阿彌陀佛は世界を創造し、人類を支配する神ではない、生死し勤苦する衆生が先づ存在し居つたのを、見そなはし給ふて、これを救済せんが爲に發心し、

思惟し發願し、修行し、成道し給ふたのである、故に専ら救済の爲の佛であつて、他の意味は更に存在して居ない、此衆生救済の意味が、其誓願に明確に表白されて居るから、淨土教徒の中には、此佛を本願成就の佛とか、因願酬報の佛とか、云つて居る者のあるのは、全くの救済佛であると云ふことを鮮かにしようとして居るのである、今、此の經典には「今現に在して説法したまふ」としてある、これは珍らしい語ではないが、意味深いものだと思ふ、先づ「今現に在す」と云ふことはよく考へねばならぬことである、人間はよく過去を語り、未來を談すが、それも全く無用ではあるまいか、過去は過去であつて歸り來ることはないから、如何に語つても如何とすることができない、未來は未來であつて、未だ來らざる世界であるから、其談は畢竟空想となるのである、佛の證りが如何に尊くあつても過去の佛であり、未來の佛であれば利益は少ない、現在の佛であつてこそ尊い、それは救はれねばならぬ衆生が現在に居るからである、此救はれねばならぬ衆生が現在に居ると云ふことこそ、佛の現在し給ふ理由であつて、現在し給はざるを得ざるは、此救はれねばならぬ衆生を救ふことのみになります佛なればである、それで今現在の語は現在の吾人の爲の救済佛なることを示されてある、現在の吾人に取つては、實にこれ已上の尊いことはないのである。

次に説法したまふと云ふこと、これこそ實に救済が表現されてある語である、佛の救済の實働は姿を以てすることもあり、意を以てすることもあらうが、正しくは口の説法を以てする、口の説法は即ち名號の流布である、佛が其名を十方に聞へしめようとせられたのは即ちこれである、『大無量壽經』に「無量壽佛の大音一切世界に宣布し衆生を化したまふ」と説かれ『往生論註』に「諸の苦の衆生、阿彌陀如來の至徳の名號、説法の音聲を聞く」とあるが如き皆これである、故に説法したまふと云ふことは、救済を施されつゝあると云ふことに外ならぬのである、それで現在に

説法したまふと云ふことは、畢竟現に一切衆生を救済したまひつゝある佛だと云ふことである、此經の説法の最初には實に此救済佛の救済を先づ提示したまふたのである。

四、極樂淨土

阿彌陀佛の現に在す世界が、極樂淨土である、それはこれより西方、十萬億の佛土を過ぎた所にある世界であると説かれてある、大體東西南北の方向は此世界でつけた空間の符號であるから、此世界を出た佛の國にまで及ぼすのは少し無理であるか知れないが、矢張りこうしてなくては空間と云ふ範疇をもつて居る有限の凡夫の頭には來ない、それで、いづれ此世界の方向を借つてではあらうが、こう説かるゝように建設され、こう説かれたのである、所が極樂淨土の所在がこう説かるゝように建設されたと云ふのは、どうした理由であらうか、また如何なる意味であらうか、眞宗の天倪と云ふ人は『阿彌陀佛説林』の跋には

夫れ安樂の能人は十方の本佛、三世の本師なり、極樂は即ち是れ法界の中央、諸佛の本國なり。

と、阿彌陀佛と極樂との爲に氣焔をあげて居るが、これも實に尤もであつて、迷と悟との一切の世界を廣い眼で見、而も阿彌陀佛を諸佛の本師とか本佛とか信じ、極樂を諸佛の本國と仰ぐならば、それが中央にあると云ふべきであつて、『大無量壽經』の往觀偈には十方の菩薩たちが、阿彌陀佛の淨土へ參觀さるゝ状態が説かれてある、十方から參觀するならば中央であると云ふことが至當である、さうすると、此世界との關係は寧ろ此世界がなせ東方にあるかと云ふことを考へねばならぬことゝなるかも知れない、さうすると在るからあると云ふ外はないことゝなる、つまり極樂

は中央と云ふべきであるが、此世界からでは極樂は西方と説かれてあるから、彼世界は西、此世界は東と云ふ外はない、大體極樂と此世界とは世界が迷悟と異つて居るから、同一迷界の而も此同一地球上の日本と支那とが東と西にあると云つたようには考へられまい、所で悟の世界である極樂が西に在るに就て、禪家の人達の中には四方を四時に配當すると西方は秋に當り、物を收藏する義があるから一切萬物の歸着所と云ふ意味であるとか、又た木火土金水の五行を四方と中央とに配當すると西方は金行に當り、堅固の義であり、五色に配當すると、西方は白色に當り、清淨の義であるから、身體堅固清淨を顯はすと云ふ説があつて、面白いのは面白いが、畢竟一の臆説に過ぎない、支那淨土教の祖師の一人である道綽禪師の『安樂集』下十五には

關浮提、日出處を生と名づけ、沒處を死と名づくと云ふを以て、死地によつて神川の趣入、其相助便なり、故に法藏菩薩の願と成佛と、西に在りて衆生を悲接したまふ。

と云ふ説がなされてある、これは此世界では、西方は日沒處であるから、吾人の歸趣する處として、最も恰適な方向である、それで阿彌陀佛が其世界を其方に在ることゝしたと云ふ説である。笠原研壽氏(南條文雄博士と共にエフ、マクの研究に専念し、遂に病を得て、明治十六年、物故した人)の遺稿である『僧墨遺稿』の巻頭にマ博士が、倫敦タイムスに寄書した同氏の小傳を、南條氏が翻譯したものが掲げてあるが、其中に今の西方淨土の説と、關係のある一つの挿話がある、其翻譯文のまゝを擧げると、

好往善人(原語はシヤケ)(原語は羅甸文を引用す、此は羅馬人常に墓石に題せし語にて「善き靈魂よオサラバ」と云ふ永訣の語なり)我善く記す、去りし年モールヴェルン(英國の地名)岡上より、共に明瞭なる日沒を見し時、西方の空色は金

色の帳幕の如くなりし、而して我輩は、其帳幕の何物を覆藏せし歟を知らざりし、此時、笠原我に語て云ふ、彼處は乃ち我輩の所謂、蘇伐伐提(即ち安樂土)の東門なりと、笠原は遠く西方を注視し、而して一切の會つて互ひに親愛せし人と俱に彼處に會し、且つ親しく阿彌陀婆(即ち無量光)佛を拜し奉るべしと信憑せり。

モールヴェルン岡上、美しき落日の景色に、西洋人の師と東洋人の弟子とが、西方憧憬の語り合ひは實に一幅の好畫題である、自分は笠原氏の麗しい信念に感激を禁じ得ない、西方淨土の建設も、此等の説話の中に眞實の理由が物語られてあらう、歸趣處として憧憬する所こそ、建設さるゝ理由があり、隨つて説かれた所以があらう。

次に「十萬億の佛土を過ぎて」と云ふ此世界との距離に就ては、魏譯の『大無量壽經』も同じであるが、異譯の上を對照すると異説はある、或は千億萬の須彌山佛國となつて居るのもあり、或は百千俱胝那由他の佛土となつて居るものもあるが、これには會合さるゝと云ふ説と、會合されないと云ふ説とがあるが、會合さるゝとする説は那由他は億が千萬か萬萬かであることを顯はすのであつて、有るものもないのも同じであり、百千は即ち十萬であり、千億萬は億の位が低いからであるとし、會合されないとする説は那由他は億よりも大數であると考へるのであるが、或は梵本が異本で本來違つて居たかも知れないが、大體は同一のことが違つて傳へられたのかも知れないから、兎も角同じだと考へておいて、大な間違はあるまい、さうして其一佛土と云ふに就ても、或は須彌山を中心とした一四天下を一佛土として、此世界と極樂との間にそれが十萬億あるとなし、或は三千大千世界を一佛土として十萬億の三千大千世界を距てゝあるとする説とがある、三千大千世界と云ふは前説の一佛土を千の三乗したものであつて、それを十萬億と云へば可なりな大數となる、ところが前説を擴充して、『梵網經』の盧舍那佛の所住の世界である、蓮花臺藏世界海が

千葉の蓮華があつて、其一華葉が一世界であつて、其一世界ごとに一釋迦佛があり、其一華葉の世界から百億の世界が現出されて、その一世界ごとにまた釋迦佛がましますとあるものが、百億に千を乗すれば丁度十萬億となり、其一世界は須彌山世界であるから、十萬億の須彌山佛國となる、それで十萬億土と云ふは此『梵網經』の釋迦佛の化益の世界を指したもので、それを超へ過ぎた處に彌陀の世界があると云ふことゝなると云ふ説もある、併し經文の意味はどうしても此釋迦佛の世界から他の十萬億の佛土を過ぎて其先きにあると云ふことであらう、釋迦佛の此世界と云ふのは此三千大千世界であるから、他の佛土も亦三千大千世界であつて、それを十萬億過ぎてと云ふことである。併しそれを『梵網經』の説によつてすべて釋迦佛が領して居る世界のこと以外ならずとすれば、十萬億の諸佛の世界を超へたと云ふは即ち釋迦の世界を超へて居る、釋迦の世界を超へたものが、即ち諸佛の世界を超へたものと云ふ意味も顯はるゝことゝはなるが、大體は十萬億佛土を此土と、極樂との中間にあるものと説かれたのであらう。

此十萬億土を過ぎると云ふことは、已に方角を西方と定め指示した已上は其距離がなくてはならぬ、其爲にかく建設され説示されたのである、それでこれも有限な空間的範疇に捕はれて居る凡夫の爲にあつたものであるが、此に自ら超越の世界であることが意味されてある、禪家の説には己心の妙體が衆惡を出過することであつて、十とは十惡、十纏、十使などの惡業、煩惱を離れた世界であることを意味されたとする説があるが、それは小刀細工の過ぎた説であらう、かように十萬億土と説かるゝは説かるべきように建設されてあるからであるが、其説かるべきような建設は有限の凡夫に應じ、而かも凡夫の世界と同じでなく、それを超へて居り、又諸佛の世界をも超へた世界である、『淨土論』に彼世界の相を觀するに「三界の道に勝過せり」とある趣きをもつたものであるようである、西方を以て歸趣を表はし、過

十萬億土を以て超過を示し、超過の世界に歸趣することを示す、これが往生淨土の教義、彌陀信仰の特色である、此語に於てそれが顯はされてある。

五、佛の久遠

救濟佛である阿彌陀佛は十劫已前に成道されたとは此經にも『大無量壽經』にも説かれてあるが、これは佛が已に發願修行の因により成道の結果を得たと示さるゝ已上、其成道の時がなくてはならぬから、十劫の時があるのであつて、その説かれたのであるから、其通りに信じて居ればよいのである、所が種々の經典を對照して見ると、單純にそうでないようである、『首楞嚴經』卷五の勢至圓通章には恒河沙劫の昔し阿彌陀佛の出世があつたように説かれ、『楞伽經』卷六には一切諸佛が悉く極樂より出でたものと示され、『般舟三昧經』の勸助品には三世の一切の佛が彌陀の念佛三昧によつて成道したと説かれ、『法華經』の化城喻品には彌陀は三千座點劫已前に滅度した大通智勝佛の第九王子であつたと傳へられてあることなどから見、殊に『法華經』の壽量品に釋迦佛の本門が開顯されて、釋尊が實に成道されたこととは、五百座點劫の古へにありとされてあることなどから思ひ合すと、どうしても阿彌陀佛も十劫と云ふ近い時間の已前に成道されたと云ふことでは、此の佛の總てを説明して居るのでないだらうと考へらるゝ所からして、實は久遠の佛だと云ふ説がなさるゝことゝなつた、叡山の覺蓮の『念佛寶號』には

久遠實成、從本垂迹、三世益物、極樂世界、顯密教主、大慈大悲阿彌陀佛
と云ふ讚辭が捧げられてあり、親鸞の『和讃』には

彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫とときたれど、塵點久遠劫よりも、ひさしき佛とみへたまふ。

久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現する。

とある如き説がでた、吾々の爲めの救濟佛であると云ふことの始末は十劫に成道された因果相の上で充分であるが、其佛は眞に如何なる方であらうかと云ふことを知らうとすると、どうしても種々の方面からこゝまで問題が及ぶこととなつて、こゝを明かにせねば、理性に於て承知ができないと云つたこととなる、所がこれは結局は佛教の佛身觀の根本からの問題であるから、深い思索と廣い知識の上でなくては窺はれないことである、随つて古來の學者も種々に考へて居るが、そこまでゆくことは此の講義としては許されまい、それで私見の一端を述べて置く。

大體久遠と云ふことは、五百塵點劫と云ふごとき或る數字で表はされてはあるが、實は無始のことと考ふべきものであらう、無始とは始め無きことであつて、始めがないと云ふことは時間を超越して居ることである、時間を超越して居るものは空間をも超越して居る、つまり相對性を超越した絶對性であると云ふことである、釋尊が久遠實成を有すると云ふことは、印度出現の釋尊は歴史上の肉の身體を受けて居るから相對性であるが、佛であるから絶對を證悟し體得して居る、已に絶對を體得したと云ふことは絶對の權化となつたので、それはやがて絶對そのものゝ、自ら顯現する活動相と見ることができるのである、釋尊の本門が開顯されて、印度出現の釋尊は其垂迹となつたのである、阿彌陀佛に於てもまたそうである、救濟佛としての阿彌陀佛は吾人相對偏執の凡夫に對立して、時間、空間、因果等の範疇の上に相對性として顯現してあるが、それは其儘にして久遠の絶對性の上にあるものである、それで其絶對性の顯現した十劫成道の相對性であると云ふことができる、これを時間的の語を以てすると、久遠實成の佛が、果後の

方便として、更に十劫成道の因果を起したと云ふこととなるのである、そうして其絶對性に於ては釋尊の證悟したものと別である譯がないから、其點では釋尊の説ける所の彌陀は、其儘釋尊所證の法であつて、釋尊は久遠實成の彌陀の顯現であると云ふことができる、それでつまり、無始久遠の絶對性の上には、恰も水あれば、風の縁あつて波あるように、相對性と顯現する、其作用が衆生の爲めの救濟佛にして自ら因果相の上に顯はれた、彌陀佛である、故に久遠ある所、必ず十劫成道がある、其彌陀佛が、自己を衆生の前に顯示する爲に釋尊として衆生に應じて肉身を以て、此地上に出現されたのである、それで釋尊は久遠の垂迹とも云ふべく、阿彌陀佛の顯現とも云はるのであり、阿彌陀佛は釋尊の本地でもあり、其所證の法でもある譯である、これで阿彌陀佛の如何なる佛でましますかと考へらるゝ端緒となるだらうと思ふ。

已上の如く久遠の佛は常に十劫成道を顯現して居らるゝとするときは、十劫と云ふ時間が如何なる意味を以て用ひられたのであらうか、これは餘り遠くない數字に於て成就滿了を意味して、十劫に成道が示され、釋尊に於て其儘に説き出されたのではあるまいか、兎に角、吾人救濟の佛は成道しまし、現に説法して、衆生を招引しつゝあるのである、これこそ吾人の歸依處であり、安住處であるのである。

六、淨土の無邊

極樂淨土は西方十萬億の佛土を過ぎた所にあると云ふことは、ある限定された邊際のある世界であると云ふことであるが、また他の經論の説で見ると必ずしもそう限つてないようである、『大無量壽經』には「恢廓曠蕩にして限極すべ

からず」と説いてあり、天親の『浄土論』には、「究竟して虚空の如し、廣大にして邊際なし」とある、これはいづれも、極樂浄土の量が無邊であることを云つたものである、無邊であることが一場の形容でなくて、眞に無邊であるならば、西方でないのは云ふまでもなく、中央でもない、十萬億土を過ぎた世界だと云ふことは無論ないのであるまいかと考へられる、また善導は『往生禮讚』に

已に窮理の聖を成ず、眞に徧空威あり、西に在りて小を現す、但だ是れ暫く機に隨ふのみ

と云はれてある、さうすると西方浄土と云ふことは、暫く機に應じて假りに現じたものであるかのようなのであるが、實はさうではない、それは吾人の相對局執の見解を以てすると西方十萬億を過ぎた處にあるとすれば無邊ではないと考へ、無邊であると云ふと、西方ではないように考へ、暫く機に隨ふたと云へば眞實でないと考へ、徧空威が有るとすると機に隨ふことはないように考へる、けれどもそれこそ眞實に遠ざかつて居ることであつて、眞に絶對の世界に遊ぶことができないからである、眞の絶對ならば絶對と云ふ語すらないのであるから、相對ではないと云ふこともないのである、それで肯定的に云へば絶對のまゝ相對であり、相對のまゝ絶對である、徧空威のまゝが西方にあるのである、故に西方浄土の邊のまゝが無邊の浄土である相對々立して居りながら、絶對無碍となつて居るのである、これは丁度、佛が十劫成道であるまゝ久遠實成であり、久遠實成のまゝに十劫成道が現じられてあるのと同じである、浄土の無邊と佛の久遠とは絶對性を顯はし、西方と十劫とは其相對性が示されてある、相對性があるから衆生を救はねばならぬ必要ができて救ふ方便がなされ、絶對性があるからよく自他の障壁を撤廢して、救が完成されるものであつて、此兩方面は何れも缺くことのできない、救済佛としての徳相である。

かくの如く阿彌陀佛や極樂浄土には相對性の根柢には絶對性があり、絶對性は相對性と顯現して、よく眞實の救済がなされる、それで佛が盡十方無碍光如來と呼ばれ、去此不遠と説かるゝ作用ができるのである、盡十方と云ふのは空間的に十方世界を盡してと云ふことであるが、同時に時間的に永久の意味も含まれて居らう、それを碍りなく照らす光明ある如來だと云ふので、言を換へると、すべての衆生の闇を破つて悉く救ふと云ふのである、これは救ふことは相對性の上にあるが、其救ひがなされるゝのは絶對性があるのであり、殊にすべての衆生が救はるゝのは絶對性があるからである、去此不遠と云ふのは『觀無量壽經』に出て居る語であつて、阿彌陀佛が此處を去ることが遠くないと云ふのである、善導は『序分義』にこれを註釋して三義を設けてある、其意味は、一には分齊が遠くない、これより十萬億土を過ぐれば彌陀の國である、十萬億土を過ぐると云へば遠いようではあるが、無限に比較すると十萬と云ふ限りがあるから近いのである、二には十萬億土は道程遙かと云へば云はるゝが、救はれて其世界に到ることは一念にゆるかるゝから遠くない、三には一念でも往くとすれば遠いとも考へられようが、衆生が若し今觀念すれば、現に見ることが出来るから遠くないと云ふのである、救ひの爲めに有限對立の形に顯現されて十萬億土に浄土があると云ふことがら、凡夫の意に應じたのであるから、實は最も近いのであるが、其土に往生することに於て、其土を見ることに於て更に近いのである、これはすべて佛が我に來り、我が佛に至る佛と衆生との關係の甚だ近いことを示されたので、これやがて救済の最も近く、現實にあることを顯はされたのである、西方十萬億土を過ぎた所にありながら、かく去此不遠たり得るのが、相對性が其儘に絶對性無邊でありうるからであると思ふ、已上要するに佛の十劫と久遠と、浄土の邊と無邊とが、相對性と絶對性とを顯はして、佛の如何なるものでましますかを大體に顯はされたもので

あつて、畢竟完全なる、救済佛であることを示して居るものであると、思ふのである。

【註】(一) 無上道とは此上なき佛の智慧の意にて佛果のことを云ふ。

(二) 能化の人と云ふことで、教主と云ふ意

(三) 『大無量壽經』の異譯である『平等覺經』(漢譯)、『大阿彌陀經』(吳譯)の説

(四) 『大無量壽經』の異譯『無量壽莊嚴經』(宋譯)、『阿彌陀經』の異譯『稱讚淨土經』(唐譯)の説

(五) 了慧の『大經鈔』五に引かれた義寂の説

(六) 宗曉の『樂邦遺稿』上、法然の『漢語燈』七などの説

(七) 『智度論』九(往帙一五十九丁左)に「佛が三千大千世界を領し二佛並び出でないことが論じられてある

(八) 殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、兩舌、惡口、貪欲、瞋恚、邪見の十種の惡事、初の三は身に、次の四は口に、後の三は

意に造る罪

(九) 無慚、無愧、嫉、慳、悔、眠、掉舉、昏沈、忿、覆の十種の煩惱のこと

(一〇) 食、瞋、痴、慢、疑、有身見、邊執見、邪見、見取見、戒禁取見の十種の煩惱のこと

(一一) 三千塵點劫と云ふのは三千大千世界を磨して塵汁となし千國土を過ぐるごとに微塵ばかりの一點を下し、其量汁の盡きたとき、其點じた國土も點じない國土も悉く抹して微塵となし、其一微塵を一劫に數へた劫數を云ふ

(一二) 五百塵點劫といふのは五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世界を抹して微塵とし五百千萬億那由他阿僧祇の三千大千世界を過ぎて一塵を下し、其微塵盡きたるとき、其經るところの國土のすべてを抹して、其一塵を一劫と數へた劫數を云ふ、それでつまり數によせて無數を示し無始を顯したものと見なければならぬ。

第五章 極樂の莊嚴

一、極樂の名義

極樂淨土を説明しようとして、其淨土と佛との存在を先づ説かれたから、次で其莊嚴相を説明せらるゝ、其莊嚴相を分かつと國土と其國土の主である佛と、其佛に伴ふ聖衆とがある、其中で國土の有様を最初に説き出された、淨土の三經は何れも淨土の莊嚴相が説かれてあるが、『大無量壽經』では先づ佛を説き、次に國土、聖衆となつて居り、『觀無量壽經』と此經とは國土、佛、聖衆の順序となつてある、さうして、其國土の莊嚴相を説かるゝことは、此經に於ては全體の分量に對して、比較的多くが費されてある、これは思ふに、『大經』は淨土の根本經典として、佛の成立した因果を示すことを主としてをるから先づ佛から示され、『觀經』や此經は吾人の願生心を起さす爲であることが主となつて、先づ微妙嚴淨の國土の莊嚴相が説き出さるゝことが必要であつたのではあるまいか、此に其莊嚴相が比較的詳しくされてある理由もあるであらう。

さうして其莊嚴相を説明しようとして、先づ極樂なる淨土の名の意義が示された、後の依正の莊嚴相は悉く此名に含まるゝ内容の説明とも見られる、兎も角、極樂であることだと、受け取られたら、それでよろしいのであると云つてよからう、其名の意義は「舍利弗、彼の土を何が故ぞ名けて極樂とする」と、佛自ら問はれて、それに自ら答へられて

其の國の衆生、衆の苦あることなく、諸の樂を受く、故に極樂と名く

と説明してある、衆の苦と云ふのは一切の苦である、苦は迷界に必然の存在である、諸の樂と云ふのは一切の樂である、樂は悟界を彩どる莊嚴である、それで都ての佛教の目的である迷を轉じて悟が開きたいと云ふことは、言をかへると苦を離れて樂が得たいと云ふことである、釋尊が王位を捐て、出家をせざるを得なかつた所以は此苦にあつた、それで其悟られた眞理は苦集滅道の四聖諦であつた、其苦諦は迷界の現實である、其苦を逃避することなく直視すると、そこに其由つて來る所の原因は煩惱業の集諦が見出され、其苦集を滅した涅槃の世界こそ、吾人の永遠の世界であり、眞實の世界である、其世界は道諦の修道によつてこそ得らるのであると云ふ大法則であつた、それで極樂と云ふ、淨土の名も畢竟其期するところは、そこにあることを示して居る、此の苦を離るゝと云ふことが、即ち解脱である、それで極樂の名はそれが解脱の世界であつて、それを求むることが、解脱を求むることであることを示してを、所が其苦を離れると云ふことは、實はすべての人間が、現にやつて居ることであるが、併し其苦と樂との内容は必ずしも同一でない、千差萬別、淺深高低がある、此に俗と聖と、宗教と非宗教との價値の高低も分れるのである、さうして今の苦樂は何物が意味されてあるであらうか。

此苦が唐譯や梵本では身心の苦痛となつて居る、天親の『淨土論』に「永く身心の惱みを離れ、樂を受くること常に間なし」と云はれてあるのはよくそれに相應して居る、これを曇鸞の『往生論註』には「身惱とは飢、渴、寒、熱、殺害等なり、心惱とは是、非、得、失、三毒等なり」と註解してある、つまり一切の苦みだと云ふことであるが、佛教は佛求道の起りが苦にあるだけ、苦に就ての説明も詳密なものがある。いはゆる、三苦、四苦、五苦、六苦、八苦、

十八苦、百十苦と云ふ如きがある、其中の三苦とは苦々と壞苦と行苦とである、苦々は普通の意味の苦であり、壞苦は樂の破壞する苦であり、行苦は行は遷流の意味で、萬法悉く遷流し無常なるによつての苦である、四苦とは生、老、病、死であり、八苦とは四苦に加ふるに、愛する者の別離の苦と、怨み憎む者の會するの苦と、求めて得ざるの苦と、五盛陰の苦とである、五盛陰とは肉體と精神である、身心のあらん限り苦しみの存在から免かるゝことができないことを意味するのである。そこで一切の苦と云へば、人生の一切が苦であり、諸法の一切が苦であり、迷界の一切が苦であると云ふことであつて、一切の物が否定さるゝ意味となるのである、百十苦の第一には流轉苦がある、迷界は生死し流轉する、其生死流轉の限りに於て悉くが苦である、此一切の苦から解脱したのが、諸の苦あることなき世界である。

其樂とは何であらうか、唐譯には「無量清淨の喜樂」とあり梵本(禰氏譯)には「限量なき樂因」となつてある、つまり無量の樂があるのである、即ち次に説き出されてある、淨土の莊嚴相の美しさ、以て目を悦ばしめ耳を樂しましめ心を聞く、すべてが悉く樂でないものはない、唐の懷感(二)は三十勝益として數へ、日本の源信(三)は淨土十樂として列ねてある、併しそれは共に一分に過ぎない、實は無量であつて説き盡すことのできないものである、即ち此の地上にはこれを説き盡すべき思想もなく言語もないのである、此の地上に於けるすべては有限であつて、無量無限をば如何ともすることができない、今此處に苦を否定し樂を肯定して居る苦樂相對の表現も、對立の表現に於てはかくするより外に仕方はないのであるが、苦に相對した樂であるならば、尙ほ眞の樂ではない、對立して居る限り有限であり有量である、限量のある限り眞實の廣い自由の世界でない、苦を眞に解脱したのでない、迷界を去つて居らないことゝなる

のである、故にこの樂は樂でない樂でなくてはならず、同時に苦でない樂である、これが悟界を現はす不苦不樂の樂であつて、淨土の樂は此の樂でなくてはならない、此の不苦不樂こそ涅槃界の相狀である、善導は「極樂無爲涅槃界」と云ひ、親鸞は無量光明土の眞佛土を顯はすに「不苦不樂を大樂と名づく」の文を以てして居り、蓮如の語に「物は思ひたるより大にちがふといふは極樂へまいりての事なるべし、こゝにてありがたや、たふとやと思ふは、物の數にてもなきなり、彼土へ生じての歡喜はことのはも有るべからず」とあるが、みな此間の消息を云はれたものであつて、吾人有限の迷界流轉の境界を越へ、吾人の想像を絶した不可思議無限の世界こそ、極樂であるのである。

所がかく云へば、吾人の世界と全くかけ離れた世界によりてあるが、さうでない、此の如き世界が造られたのは、實に吾人の如き迷界流轉の世界に苦しんで居る者があるからである、『安心決定鈔』には

極樂といふ名をきかばあはわが往生すべきところを成就したまひにけり、衆生往生せずば正覺とらじとちかひたまひし、法藏比丘の成就したまへる極樂よとおもふべし(中略)われらがごとくなる愚癡愚見の衆生のための樂のきはまりなるゆへに極樂といふなり、

淨土の依正二報もまたしかなり、依報は寶樹の葉ひとつも極惡のわれらがためならぬことなければ、機法一體にして南無阿彌陀佛なり、正報は眉間の白毫相より、千輻輪のあなうらにいたるまで、常没の衆生の願行圓滿せる御かたちなるゆへ、また機法一體にして南無阿彌陀佛なり

と味はれてある、實にかく味はれてこそ、極樂も我が爲めの極樂であつて、私として極樂を語り得ると云ふものであらう。

二、七重の欄網樹

極樂淨土の莊嚴相を示すに、先づ欄楯と羅網と行樹との七重であるのが擧げられた、經文には

又舍利弗、極樂國土には七重の欄楯、七重の羅網、七重の行樹あり、皆是れ四寶にして、周匝し圍繞せり、是故に彼國を名づけて極樂と曰ふ

とある、欄楯はテスリのこと、『玄應音義』卷一には欄は檻であるが、縦を檻と云ひ、横を楯と云ふとしてある、テスリの縦と横とのことである、所がこれに當る梵語はベーチカー (Vaidika) であつて、露臺の如きものである、つまりそれにテスリが設けてあるから欄楯と譯されたのであらう、それが七重になつて居る、羅網は寶樹の上にかゝつて居る鈴網であつて、これも亦た七重である、行樹は並樹である、梵本によると多羅 (Tala) の並樹であつて、それも七列になつて居るのである、さうして其欄も網も樹もいづれも金、銀、瑠璃、玻璃の四寶で造られてあつて、これ等で淨土の諸莊嚴はそれらに圍まれてある、かくの如き妙莊嚴のある世界だから極樂と云はるのであると云ふのである、この周匝し圍繞すと云ふ語はちよつと解し難いが、窺基の『阿彌陀經通贊疏』卷中には二説が設けられてある、一説は欄楯が寶樹を圍繞して居るから圍繞と云ふとし、一説は欄楯、羅網、行樹が、國土處々の莊嚴を圍繞するから云ふとするのである、唐譯は後の説のやうな意味である。

この寶樹の七重について、善導の『定善義』には『觀經』第四觀の「七重行樹の想を作せ」とあるを解して今七重と言ふは、或は一樹あり、黄金を根となし、紫金を莖となし、白銀を枝となし、瑪瑙を條となし、珊瑚を葉とな

し、白玉を華となし、眞珠を菓となす、是の如き七重互に根莖乃至華菓等となり、七七四十九重なりと云ふ説がある、これは『大經』上卷の七寶諸樹を示された一段に依られたものであらう、七重と云ふことに就て、此の如く複雑、微妙に想像して、淨土をいやが上にも美しいものにせられたのであるが、經文に示さるゝ淨土の莊嚴相は畢竟一分に過ぎないのであるから、さらに、微妙なものとするのは決して不都合なことではない。

七重の羅網について『觀經』の寶樹觀には「妙眞珠網、樹上に彌覆せり、一々の樹上に七重の網あり、一々の網の間に、五百億の妙華宮殿あり、梵王宮の如し、諸天童子自然に中に在り」とあり、『大經』には「珍妙の寶網其上に網覆せり」とある、樹上に寶網が覆うて、それに種々な莊嚴が施されてある模様がこれ等によつて想像さるゝやうである、所がこれらの莊嚴について、これがある意味の表象と見て、七重と云ふのは七覺支（擇法、精進、喜、除、捨、定、念）を表すとか、欄楯の横堅は光明の空間的遍滿と壽命の時間的無限とを表し、羅網の彌覆するは無蓋の大悲、法界に彌布することを表し、四寶は涅槃の四徳である常樂我淨を表するとする説もある、此も面白い見方であるが、淨土の莊嚴相は悟界の有する藝術的美であつて、これを強ひて學問的なものや、倫理的のものにする必要はないのであつて、美は美としてながむべきであらう、此の如き美の世界も「他方の凡聖の類を引かんが爲めの故に佛、此の不思議を現すとある如く、吾人を引く爲に建設されたものである、故に其説述は吾人の知る所のものを以てせられてある、これを餘方に因順するのであると云はれてある。

淨土の莊嚴相は餘方に因順して此の世界に比類すべきものゝある如き説き方ではあるが、迷と悟と世界は別であるから、實は同日に語るべきものではない、善導は寶樹について

諸の寶林樹は皆彌陀無漏心の中より流出す、佛心是れ無漏なるに由るが故に、其樹も亦これ無漏なりと云ひ、其樹の量について

量を言へば一々の樹高さ三十二萬里にして、亦た老死の者なし、亦小生の者なし、亦初生漸長の者なし、起れば即ち同時に頓に起る、量數等齊なり、何の意をもつてか然るとなれば、彼の界位は是れ無漏無生の界なり、豈に生死漸長の義あらんや

と論じられてある、善導が寶樹について顯はさんとせられた所は、それが吾人の各々の業感によつて造り出された此迷界の物質とは全く別の世界のものであつて、それは彌陀の悟界に於ける無漏心から派出されたものである、それで迷界の生老病死の影はない、大小とか、長幼とか、生死とかいつた差別不平等はない、平等一如の悟界であることであつた、實は大小長短方圓高下、それが相よつて莊嚴相を造つて居るのではあらうが、悟の世界に於ては其差別相のままが平等の無生無滅、不一不異でなくてはならぬ、差別のあるまゝに差別を撤廢された世界である、それは畢竟彌陀無漏心の流出に外ならないものであつた、こゝに於て淨土の莊嚴相が如何なるものであるかは考へられよう。

二、七寶の蓮池と樓閣

次に七寶の蓮池と、其池邊の樓閣との莊嚴を述べられてある、その經文には

又舍利弗、極樂國土には七寶の池あり、八功德水、其の中に充滿せり、池の底には純ら金沙を以て地に布けり、四邊に階道あり、金銀瑠璃瓊瑤をもつて合成せり、上に樓閣あり、亦金、銀、瑠璃、瓊瑤、磲磔、赤珠、碼瑙を以て

之を嚴飾せり、池中の蓮華は大き車輪の如く、青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり、舍利弗、極樂國土には是の如き功德莊嚴を成就せり、
 とある、蓮池の周圍が七寶でまきて居る、其七寶は樓閣の嚴られて居る金銀等の七寶と同じである、其池の中には八功德水が湛へて居る、八功德水とは唐譯に「一には澄淨、二には清冷、三には甘美、四には輕軟、五には潤澤、六には安和、七には飲む時、飢渴等の無量の過患を除く、八には飲み已つて定んで能く諸根四大を長養し、種々殊勝の善根を増益す、多福の衆生常に樂んで受用す」とある、つまり良水の持つべき、諸の條件を具備した理想的な水である。さうしてその池底の沙は金沙である、此の池底の沙については『大經』には金、銀、瑠璃、水精、珊瑚、琥珀、碼瑙、磲磲、紫金、白玉が池によつて異なることが擧げられ、『觀經』には雜色の金剛としてある、一寶であり多寶であり、一色であり、雜色である、いづれも淨土の妙莊嚴の趣きの様々である、其池の四方には金銀等の四寶より成れる階道があり、其のほとりには七寶で飾られた樓閣があり、池中には蓮華がある、其大さは車輪ほどである、尤も此大さの車輪と云ふのについては、『觀經』には「一々の蓮華は團圓正等にして十二由旬なり」とある、一由旬とは普通四十里と云はれてあるから、大きいものである、それに今車輪の如くとあつては餘りに比較にならない、そこからして、これは形の圓滿なのを喩へたのであらうと云ふ説もあるが、大さとあるから大さの分量のことであらう、此世界のものと異なることを示すには十二由旬がよからうし、卑近なもので比例すれば車輪の如しとするもよいだらう、實は淨土の莊嚴相は吾人迷界差別に固定した見解の前にある、限つた數量を持つものでないから、大と説かんとすれば大であり、小と説かんとすれば小なるものであらう、さうして其蓮華に青、黄、赤、白の四色があつて、各々其色の如き光がある、

これが唐譯や梵本の意を加へると各々の色の影があり、雜色があり、また『大經』には青、白、玄、黄、朱、紫の六色となつて居る、つまり無量の色が無量の光を放ち、無量の影を作つて説き、れない美しい世界が現はされてあると思へばよいのであらう、さうして此の莊嚴についても、表象と見て一々に或る意味を與へたものもあるが、餘りにそれは人間の理智を加へ過ぎた小刀細工に陥るやうに思はるゝ、それよりも全體として悟の世界の有つ聖なる美を、吾人の理解しうるやうに、吾人の世界の事象によせて示したものと見るべきであらう。

所が大體に阿彌陀佛の悟の世界中の光景であるから、此の迷の世界とは本質に於て別であることは、上の寶樹のところでもいつたやうであつて、實に彌陀流出の無漏衆生の世界である、此寶池に就ては善導は『觀經』の池底の沙の雜色金剛なるについて、「金剛といふは即ち是れ無漏の體なり」としてその事を顯はされてある、これは金剛沙が無漏であるばかりでなく、一切は無漏である、かくの如く無漏無生で吾人の世界とは別でありながら、それが吾人と離れられない關係をもつて居る、それは寶樹の葉一枚も、寶池の水一滴も吾人の爲に成就されたものでないものはないと云ふことである、それは此寶樓は吾人が住すべき處であり、寶蓮は吾人の坐すべきものである、善導はこれを讃して
 (一三) 四種の蓮華開け即ち香し、十方の人天生を得る者、各々一箇に坐して眞常を聽く、是の故に彼國を極樂と名づく
 と云ひ、法照は讃して

(一四) 此の界に一人、佛の名を念すれば、西方に便ち一蓮あつて生ず、但一生常にして不退ならしむれば、此華還て此の間に到りて迎ふ

と云はれてある、淨土の莊嚴も單に客觀的な實在として見た所には實に存在しなくて、吾人に認識された吾人の念佛

となつたとき、吾人の淨土として展開する、一人念佛すれば、一蓮生じ此華還て吾人を迎へ、此華に坐して眞常の法を聞く、此に於て吾人と相離るゝことのできない、淨土の莊嚴となるのである。

四、天樂、金地、妙華

次に天樂と金地と妙華との莊嚴が説かれてある、經文には

又、舍利弗、彼の佛の國土には常に天樂をなす、黄金を地となし、晝夜六時に曼荼羅華を雨らす、其の國の衆生、常に清旦を以て、各々衣鉢を以て衆の妙華を盛れ、他方十萬億の佛を供養し、即ち食時を以て本國に還り到りて飯食經行す、舍利弗、極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり

とある、先づ彼國には微妙の音楽がある、天樂の天は最勝微妙と云ふ意味の形容詞である、それが如何に最勝微妙であるかと云ふことを、唐譯には、

極樂世界淨佛土の中には自然に常に無量無邊の衆妙の伎樂あり、音曲和雅にして愛樂すべし、諸の有情の類、斯の妙音を聞けば諸惡煩惱悉く皆消滅し、無量の善法、漸次に増長して速に無上正等菩提を證す

とある、音曲が和雅にして煩惱が消え善法が生ずる、藝術も道德も完全に調和された世界である、さうして其の國の大地は黄金である、『大經』上卷には「自然の七寶、合成して地となせり」とあり、『觀經』には瑠璃地とあり、いづれも妙相の一面、あいよつて單調でないことが知らるゝ。

さうして此國には晝夜六時に曼荼羅華がふる、晝夜六時は晝三時夜三時、晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜で

ある、これは印度の一日の時を分つ法であつて、佛教者は多くこれを用ひた、『大智度論』卷七に「菩薩の法は晝の三時夜の三時に常に三事を行す」とあるが如きこれである、『大經』に風吹て華を散すること六返とあるのも一日のことであらう。ところで極樂には日月の出沒があり、明闇があるわけでないから晝夜の語は解らないやうであるが、これには花合し鳥鳴きやむを夜とし、風吹き鳥鳴くを晝とすとか、『悲華經』卷一の説、青蓮華開くを夜とし、赤蓮華開くを夜とする説、『大方等大集經』卷四に出づゝなどもあるが、要するに此世界にしたがつた説である、曼荼羅華 (Mandala) と云ふのは悦意華、適意華、白華などと譯され、天上の華であつて、それが地上に移されて、日本では朝鮮朝顔などと云はれて居るものであると云ふことであるが、それまでさがさなくて最も妙へにして最も美しい華だとして置けば充分であらう、唐譯には「光澤香潔にして細軟雜色あり、見る者をして身心適悦ならしむと雖、而も貪着せず、有情の無量無數不可思議殊勝の功德を増長す」とあるので、よくわかると思ふ。

さうして其國の聖衆たちは、このもろ／＼の妙華を夜鉢に盛つて、清旦に他方の諸佛國に到つて、諸佛を供養し、忽ちにして歸り來つて自ら飯食し經行するのである、此の淨土の飯食については『大經』上には「食せんと欲する時は七寶の鉢器、自然に前に在り、百味の飲食自然に盈滿せり、此食有りと雖、實に食する者なし、但色を見、香を聞いて以て食とすれば、自然に飽足す、身心柔輭にして味着する所なし、事已りぬれば化し去る、時至れば復た現す」とある、これも人にかくもあつたらと思はしむる、食の模様であらう。

所で淨土の聖衆たちの諸佛供養と云ふことであるが、これが菩薩の仕事として、衆生教化の利他行と相並んで、必ず行すべきことゝされてある、淨土の三經にそれが説き示されてあるばかりでなく、すべての經典に出て居ると申して

よい、故に天親の『浄土論』にも菩薩の四種の功德を數へて、其中には供養意の如くなることが擧げられてあるが、これはよく考ふべきことであつて、人を充たさんとするならば、先づ自ら充たされねばならぬ、先づ自ら充たせようとするものは、自己を導く師に對して自己の何物をも捧げねばならぬ、菩薩が佛を供養する所以はこゝにあるのである、吾人はとかく師たらんことを欲して、弟子たらんことを欲しない、こゝに魔道に陥りて師たり得ない所以がある、深く反省すべきであると思ふ。

五、妙鳥微風の法音

次に妙鳥の聲、微風の音、ことごとく法音であつて、大衆の佛道を増進せしむることが説かれてある、經文には先づ鳥音を擧げて

復た次に舍利弗、彼國には常に種々奇妙雜色の鳥あり、白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥なり、是のもろくの鳥、晝夜六時に和雅の音を出す、其の音五根、五力、七菩提分、八聖道分、是の如き等の法を演暢す、其の土の衆生、是の音を聞き已つて、皆悉く、佛を念じ、法を念じ、僧を念す、舍利弗、汝此鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふこと勿れ、所以はいかん、彼の佛の國土には三惡趣なければなり、舍利弗、其の佛の國土には尙ほ三惡道の名もなし、何に況んや實あらんや、是のもろくの鳥は皆是れ、阿彌陀佛の法音をして宣流せしめんと欲したまふ變化の所作なり。

とある、種々に奇妙であり、種々に雜色である、白鶴、孔雀等の種々の鳥が、晝夜、和雅の音を出して鳴く、其音は

五根、五力等の法音を述べる、それで、之を聞くものは誰れもが、佛、法、僧の三寶を念せざるを得ない。所がこゝに鳥は畜生に屬す、それがどうして浄土にあり得るか云ふ不審がある、それを明かにして、此の鳥を罪報の所産である畜生の所屬に考へてはならない、それは彼の浄土に三惡道はなく、其の名すらないからである、然らばいかにして鳥が存在するか、それは佛が法音を宣べしめんが爲に變化し出したるものに外ならないのであると説かれたのである。次に風音を擧げて

舍利弗、彼の佛國土には微風、吹いて、諸の寶行樹及び寶羅網を動かし、譬は百千種の樂を同時に俱に作すが如し、是の音を聞く者は、皆自然に念佛、念法、念僧の心を生ず、舍利弗、其の佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり、

と説かれてある、微風は寶樹、寶網に吹きわたつて、百千種の音樂が俱になされて、諧和、整調の世界が展開される、そこで、其音を聞くものは、また念佛、念法、念僧の心が生ずると云ふのである。

浄土の空を寶樹の枝から枝に飛びわたり、和雅の音を出す、奇妙雜色の美しい鳥は、自己の業から受けた畜生の世界ではなくて、それは悉く阿彌陀佛の變化であると云ふことは、それが畜生の鳥が浄土に存在しないと云ふ説明だけでなくて、浄土の莊嚴相のすべてが、阿彌陀佛の變現だと云ふことを示すものである、善導が寶樹を彌陀の流出である、浄土は無漏無生の世界であることを高調せらるゝもこれである、已に彌陀佛の變現であれば、これが彌陀體內の妙徳であつて、所證の眞如實相の妙相とも云はれ、能證の佛陀の妙徳とも云はるゝ、鳥音も風音も等しく法音を述べて、三寶を念せしむるもこれが爲である、何れにするも、佛と浄土、正報と依報とが不二であるところの一の世界で

ある、一の世界の上に豊富な微妙莊嚴の差別相が現出される、其現出のまゝが一の世界である、一の世界は絶対の世界である、吾人の相對局執の世界とは全く別であるところの彼岸の世界であることが、巧みに説き出されたものと見なければならぬ。

かくの如き世界であるから舒ぶれば依報、正報、無量無邊の妙莊嚴が展開されるが、卷けば阿彌陀佛の一體に收攝さるゝ、華池寶閣の嚴淨なのに美の世界が見られ五根、五力、七菩提分、八聖道分に善の世界と眞の世界とが顯はされ、さうしてそれが阿彌陀佛の一體に收攝さるゝ所に聖の世界があらう、それで此世界は眞理の世界であると共に悟の世界であり、佛の世界である、これはこそ鳥音の宣ぶる五根、五力、七菩提分、八聖道分も聞くものをして三寶を念ぜしめ、百千種の音樂の諸和せるが如き風音も三寶を念せしむる、三寶を念することは念佛の一法に歸するのである、要するに佛を念することゝなるのは、實に尊い、興味のある説述である。

大體三寶を念する三念は三五小乘經典から大乘經典に通じた説であつて、低級な教にも、高級な教にも、原始的な教義にも發達した教義にもあつて、其所念の三寶には種々複雑な説明もあるが、普通廣く用ひられてゐるのは同體三寶、別體三寶、住持三寶の三種三寶である、其中に別體三寶とは覺つた佛と、其佛の覺つた法、説いた法と、其法を實行しつゝ和合して居る僧衆とであるが、これは畢竟眞理そのものゝ上に存する三寶であるとして、眞理一體の上に見るのが同體の三寶である、住持の三寶は別體の三寶が佛像、經卷、僧侶として後代に住持さるゝことであるが、今淨土に於て念する三寶は淨土に於ける別相の三寶であつて、佛は阿彌陀佛であり、法は其の本願名號であり、僧は佛の正覺華中より生れ出でた聖衆であらう、若しもこれを更に展開するならば十方三世の佛と、八萬の諸聖教と、一切の諸苦

薩とも顯はるゝであらうが、それは悉くが、阿彌陀佛によつて展開されたものであるから、一佛に收まり、名號の一法になる、聖衆といへども阿彌陀佛を離れて別に存在するものでない、故に念三寶は即ち念佛の一法となつて、唯だ佛徳を仰ぎ、佛恩を念じ、法味を味ひつゝあるの外はないのである、此念佛の一法は此地上に移されては、吾人が唯一解脱の法として提示されてある、大小乗を通じてこの三念も自ら歸結を其の邊に置くものと見ることができると思ふ。

【註】(一) 『群疑論』卷五、三十勝益章

(二) 『往生要集』卷上未三十三丁

(三) 『法華證』卷下十三丁

(四) 『教行信證』眞佛上卷九丁

(五) 『蓮如上人御一代記開書』第二百四十七條

(六) 窺基の『阿彌陀通贊疏』卷中に出づ

(七) 法霖の『阿彌陀經淨淨決』卷上三十一丁に出づ

(八) 『法華證』卷下八丁

(九) 『定善義』十三丁

(一〇) 『智圓の阿彌陀經疏』の說

(一一) 『定善義』十六丁

(一二) 『法華證』下六丁

(一三) 『五會法華證』本 廿三丁

- (一四) この經文が現流の本は「而雨曼陀羅華」となつて居るが而雨の二字高麗本は天雨となり、宋、元、明三本は雨天となつて居る、雨るのは天からだから天雨でもよく、華は天上の華と稱せらるゝものであるから天の曼陀羅華を雨らすでもよく、單に雨の字は上の六時を承けて下の語を起す文字と見てもよい、但し唐譯に「常雨種種々上妙天華」とあるは三本に近い。
- (一五) 乘恩の「淨土三部經音義」五に諸説が擧げてあるが、其中の一説には「花を盛るの器、形、圓の如くして一足あり手拵げて供養す」と云ふ説もあり、それが同時に衣箱であるから衣箱と云ふとも云はれ、又衣箱は衣襟であつて、花を衣につゝんで佛に供養するとき、手にそこを執つて空中に旋轉すると云ふ説もある。
- (一六) 食時、僧衆の食時は中前であつて日中前であるから、今の午前十一時頃をいふ、尤も唐譯には「一食頃に於て他方無量の世界に至つて」とあるから、短い時のことを食頃といつたものであるが、「大經」下によつて見ると、食頃に往詣し、食時の前に還るとなつてあるから、兩方ともにあることである。
- (一七) 一定の地を徐ろに往返すること、運動の爲めである。
- (一八) 具さに奢梨迦(Sherika)印度に産する鳥の一種、漢譯には鶯鷯鳥、百舌鳥など、譯されてある、雀の二倍大で、全身黒色、頸部に黄色を帯び、嘴は赤く、其性伶俐で、能く人語を暗誦すること鸚鵡の如しと云ふ。
- (一九) 共命は印度北方に産する雉子の一種、梵語耆婆耆婆(Jivajiva)譯して共命と云ふ、美音であつて而も人面にして禽形、一身にして兩首ありとも云はれてある。
- (二〇) 五根は涅槃の證を得る爲の修道の科目である三十七道品の一種、信根、精進根、念根、定根、慧根を云ふ、此五は共に無漏の智慧を出す、勝れた作用があるから根と云ふ。
- (二一) 五力は三十七道品の一種、信力、精進力、念力、定力、慧力を云ふ信等の五根が増長して障を破する力用あるに至りたる名。
- (二二) 七菩提分は七覺支とも云ふ、三十七道品の一種、擇法、精進、喜、除、捨、定、念を云ふ、これを菩提分とか覺支と云ふ。

- (二三) か云ふのは諸法の眞偽を覺了簡擇する無漏の智慧の支分であるから云ひ、又た無學の智慧の因分であるから云ふ。
- (二四) 八聖道分は三十七道品の一種、佛教に於て最も廣く説かれてある修道の科目であつて、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を云ふ、これは正しくして聖なる道であるから聖道と云ふ。
- (二五) 地獄、餓鬼、畜生の三世界を云ふ、共に惡の結果であるから惡趣と云ふ、三惡道も同じ、今、鳥類は實の鳥類であれば畜生に屬すべきものであるから、此論がある。
- (二六) 『增一阿含經』卷四九(縮長吠三)に「三念によりて三惡道におちず、善所天上人中に生ず」とある如きこれである。

第六章 彌陀と聖衆

一、彌陀の名義

極樂淨土の依報の莊嚴相を説くこと、上に了つたから、次に正報の莊嚴相が説かるゝ、其正報には淨土の主たる彌陀と、伴たる聖衆とがある、所が依報の莊嚴が極樂の名義に始まり、多くの莊嚴相が其内容の説明とも見らるゝ説き方であると同じく、正報にも先づ阿彌陀なる佛名の意味が説明されて、而もそれが佛を説くことの全部であり、次に聖衆が説かれてあるが、それも自ら佛名の意味の内容をなすものと考へらるゝ説き方となつて居る、其の先づ佛名の意味を示された、經文には

舍利弗、汝が意に於ていかん、彼の佛を何が故ぞ阿彌陀と號する、舍利弗、彼の佛の光明無量にして、十方の國を照すに障礙する所なし、是の故に號して阿彌陀となす、又、舍利弗、彼の佛の壽命及び其の人民も無量無邊阿僧祇

劫なり、故に阿彌陀と名づく、舍利弗、阿彌陀成佛より以來、今に於て十劫なり

と説かれてある、先づ釋尊は自ら淨土の佛を阿彌陀と名づくる所以を問はれた、それに汝が意に於ていかんとあるのは舍利弗の注意を特に引かれたのである、此語は後に一箇所あるだけであつて、今の經説が如何に重要であるかゞ示されたものである、思ふに淨土の經典は畢竟阿彌陀佛の御名の宣説である、それは此御名こそ、衆生の救はるゝ所以の法であるからである。然るに今は直ちに其の御名の意義を開示せんとするのであるから、要中の最要であることは云ふまでもあるまい、さうしてそれに答ふるには、光明が限量がなく、十方の國を照らして障礙がないから阿彌陀と云ひ、また、佛の壽命及び其人民即ち聖衆の壽命が無量無邊阿僧祇劫と、これまた限りがないから阿彌陀と云ふとされてある、つまり光明無量と壽命無量とを以て阿彌陀の名義を示されたのであつて、それに聖衆の壽命の無量までが加へられてある所には、阿彌陀佛ならでは見ることのできない特色がある、阿彌陀の名が光明無量、壽命無量の意義であることは、大體此佛を顯はす梵語には阿彌陀婆(Anantaya)と阿彌陀斯(Ananta)とあつて、前者は無量光、後者は無量壽である、此二つの意味の含められてあるのが、今の阿彌陀であるから、一阿彌陀の名から此二意が説き出されたのであらう、若し單に阿彌陀(anta)と云へば「無量の」と云ふ形容詞であるが、それは、何物かゞ無量でなくてはならぬが、それは一切が無量であらう、絶對の眞理を悟つた佛は無量でなくてはならぬ、所が其一切は光明と壽命とを以て總該することができるから、此無量に於て此二義を含み、分つて云ふ時に二つの名となるのであらう、さうして、此光壽無量の佛も本有自然の佛でなくして、衆生の爲めに因果相を示現して、發願修行の因力によつて成道されたる果相なることを明かにして、阿彌陀佛は成佛已來十劫であると説かれてある、要するに衆生の爲めに極樂淨

土に成道された佛は、光明無量、壽命無量の徳ましく、而も其の國の衆生まで悉く佛と等しく無量ならしめたまふから、阿彌陀佛と申したてまつる、と云ふのである、さうして此の衆生が佛と等しからしめらるゝと云ふのが衆生の救はるゝことであるから、此の御名こそ衆生の救はるゝ所以の法と云はるゝのである。

二、光壽の二徳

阿彌陀の名に顯はされた佛の徳は光明無量と壽命無量とであるが、宗教上の信念の對象であり、終局の理想であるものは絶對であり、絶對は無限無量のものであることは云ふまでもあるまい、所が其の無限無量が光と壽とをもつて顯はさるゝのはどうした譯であらうか、それは壽は一切生物の第一の望みであり、光も亦それに劣らぬものである一切の生物が何よりも厭ふものは死であつて、いかにかしてこれを避けて生を得たいと望み、またそれに同じい意を以て闇黒を厭ひ光明を求める、此の如く生命と光明とに對する欲望は熾烈であるから、人類に於ては延年轉壽の祈願となり、太陽崇拜の宗教となり、つひに聖化されては永遠生命の要求となり、無限絶對の觀照となつて宗教の世界に入るものである、こゝに其の對象其の理想に於て光壽の無量のあるのは最も當然のことである。しかし吾人は單に人類の欲望の進化とのみ考へたくない、それよりも寧ろ其の求めらるゝ永遠の生命、絶對無限の世界の本然の相として其活動相として、此の二つを以てするものであると考へたい、即ち佛の徳そのものを顯はすに此の二徳であることが、最も適當であるから、佛自らこれを以て徳とし、これが名に施され、釋尊に説き出されたものと云ふべきであらう。それは大體光明無量は空間的遍滿であり、壽命無量は時間的常住である、これを横に十方に遍し、豎に三世に徹す

ると云ふ、絶対無限の眞理、眞如實相一如の世界を全うして居る阿彌陀佛を顯はすには、どうしても空間と時間とに無限であるものを以てしなければならぬ、尤も時間、空間の範疇も眞に其の世界を考へるには不適當であることは云ふまでもないが、併し範疇なくして考へ得ない吾人の前に顯現するにはどうしても此範疇によらねばならない、そこで阿彌陀佛は其因位の本願に於て光明の無量と壽命の無量とを願じて、果上に於て阿彌陀佛と成就したのである、親鸞が

(三) この一如よりかたちをあらはして方便法身ともうす、その御すがたに法藏比丘となりのたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまうなり、この誓願のなかに光明無量の本願、壽命無量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方無碍光如來となづけけたてまつりたまへり、この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如來とまうすなり、すなはち阿彌陀如來とまうすなり

と云はれたのはそれであらう、此横遍の光明無量と、堅徹の壽命無量との二徳は、それを體の上で見ると佛が悟つて本體として居る、無爲涅槃の理の常住不變なるものが壽命無量であり、其理を自ら觀照して普く及ばざる所なきものが光明無量であらう、つまり悟の本體たる眞理そのものが時間的常住、空間的普遍であつて自らが自らを觀照して常住普遍に働いて居ることが、光壽二無量の體であらう、次に相の上で見ると壽命無量は佛の永遠不滅の壽命として、光明無量は十方に輝く佛の光照として顯はれてある、佛の永遠の壽命は常住不變の眞理を體として始めて、存在することができ、遍照の光明は眞理觀照の智慧を體として始めて起ることができ、この光明、壽命もまたこれ横遍堅徹である、更にこれを其の作用に於て見るならば、光明無量は遍く十方衆生を化益し、壽命無量は其化益永遠にして未

來際をつくす、これまた横遍堅徹である、法然は

(四) 光明無量の願は、横に一切衆生を廣く攝取せんが爲なり、壽命無量の願は堅に十方世界を久しく利益せんが爲なりと云ひ、存覺は

(五) 光明の無量なるは、横に十方の利益ほとりなきことをあらはし、壽命の無量なるは、堅に三世の化導のかぎりなきことをしめすなり

と云へるが如き、みなこれである、善導が經の此の一節の意味を讚嘆して

(六) 果、涅槃を得て常に世に住す、壽命延長にして量るべきこと難し、千劫、萬劫、恒沙劫、兆載永劫にしてまた無央なり一たび坐して移ることなく、また不動なり、後際を徹窮して身光を放つ、靈儀の相好眞金色なり、巍々として獨り坐して衆生を度す、

と云へるが如き、其體と相と作用との上に亘つて示されたものである、更にこれを體の上で壽と光とを理と智、即ち理の寂然不動が壽、智の觀照普遍が理と分つて説明することができ、用の上に於て光明は衆生の無明を照破して信心念佛の因を成し、壽命は同じく永遠の生命に融ぜしむる往生成佛の果を成すと云ふことができよう。存覺はさらに

(七) 光明無量の徳に歸して攝取不捨の益にあづかり、壽命無量の徳に歸して永生不滅の身をえんとねがふこゝろなりと云へるはこれである、或は更に壽命を果體と見、光明を其作用と分つて見た場合もある、體相用の上に亘つて壽命は本體をなして、光明はそれから放たれて活動しつゝある作用であることを見ることは實に自然であらう。

已上の如くし佛徳のすべてを盡すことができるから、これを以て名に施されたのである、それで此の名の意義を解

すれば、そこに佛の全體は顯現さるゝのである、若し佛の相好の如きをとつて、佛を顯はさんとするならば、それは全體としての佛は到底顯はさるゝものでない、親鸞が『教行信證』眞佛土卷に於て佛を顯はさんとして、此の光壽二無量を以てして居る如き、また此の故であらう。

尙ほ此の光壽に就て説明せねばならぬものは多い、光明に就ては『大經』には十二の徳を教へて十二光佛として示されてある、即ち無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、談王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛である、其の意味は光明は時間的に無限量であり、空間的に無邊際を照らし、衆生の煩惱惡業其他何物にも障礙せらるゝことなく、また對立すべく敵對すべきものなく、光明中の王であり、衆生の貪欲を對治する清淨光であり、眞慧を對治する歡喜光であり、愚痴を對治する智慧光であり、其光照は不斷であつて、吾人の思慮を絶し稱説を離れて居り、此の世の日月を以て比例すべきものでない、遙かに超越した光明であると云ふ意味である、天親の『淨土論』には盡十方無碍光如來と呼ばれてある、これも今の光明無量の文と意を同じくして居るものである、また壽命に就ては法身常住の理體としての諸佛のそれとの關係の如き問題もあつて詳しく論ずべきであるが、今はそれに及ばずに置く。

三、及び其人民も

經の文に「彼佛の壽命及び其の人民も無量無邊阿僧祇劫なり」とあるが、これは佛の壽命も無量、人民の壽命も無量と云ふことであるが、佛の名の意義を明かにする爲に、佛の壽命の無量なることを顯はすのは當然であるが、其の

人民の壽命の無量なることを顯はすのは、如何なる故であらうか、實はこれは上に云ふ如く阿彌陀佛の特色を説いて居るものである、それは佛の徳を談るとき、光壽二無量を以てせらるゝものは頗る多い、『法華經』壽量品に釋尊本門の徳を示して「慧光照無量壽命無數劫」と云ひ、『大品般若』には「壽命無量光明具足を得んと欲せば當に般若波羅蜜を學ぶべし」とあるを『智度論』三十四には論じて

諸佛の壽命みな悉く無量なり、人を度せんがための故に現じて長短あり(中略)光明の長短の義また是の如しと云ひ、『十住毘婆沙論』易行品に海徳佛の徳をたゞへて

壽命量あることなし、光明照して極りなし

と云へるが如き、これである、これは苟くも眞理を體現した佛は、眞理の永遠性、普遍性を體得しないものはない、已にさうであれば其の壽命も無量であり、光明も無量であるべきことは明かなことである、然るに彌陀に於てはそれが其國の人民のすべてに及ぼさるゝ、即ち彌陀は一切衆生をして自らの如く光明無量、壽命無量ならしむる徳を有して居る、これは彌陀が四十八願に於て十二、十三の兩願に光明無量と壽命無量とを願じて、自己の法身を成じ、十八願に於て一切衆生をして其淨土へ往生せしめんと願じた、其の往生せしむると云ふことは自己の世界へ入らしめ、自己の如くならしめんとするのである、其の自己の如くならしむるのは光壽無量ならしむるのであつて、これは互に相全うして、離るべきものでないから、光壽無量を語るにも、一切衆生をしてその如くならしむると云ふ意味を離すことはできない、さうしてこそ、そこに彌陀の特色が顯はるゝのである、故に今、名義の内容として「及び其人民も」の語がでてくるのである、さうして此語は唯壽命の上だけに云はれてあるが、實は光明にまで及ぶのである、善導は

今の一節を讀じられて

(七) 十方の凡聖(中略)一念空に乗じて佛會に入れば、身色壽命ことごとく皆平し

と云つて居る、身色には身光は自らそうて居ることは云ふまでもあるまい、かくして阿彌陀佛と聖衆とは同一證悟の世界にあることが明かにされてある、こゝに絶對一に契へる世界の風光が見らるゝのである、それで此聖衆の壽命の無量が此の名義の中に語られたことは、非常に意味深いこととなるのである、慧鑑の『阿彌陀經繁釋』には此事に就て、一には徒衆の徳に依て佛徳を顯はす、譬へば人民の榮福を王の徳と稱する如くである、それで名義となる、二には徒衆の壽命が佛の本願の力によつてあるのであつて、此世界に於けるが如く、自己の業感によつて得たものとは別である、故に名義となる、三には機法一體の名であるから、佛の名のまゝが衆生の名であり、衆生の名のまゝが佛の名であつて、佛と衆生と同一體であることが、これによつて彰はされて、名義となると云ふ意味に説明されてあるが、尤もな説明である。

四、聖衆の無量

次に聖衆の莊嚴として、其國の聲聞、菩薩の數の無量であることが示されてある、經文に

又、舍利弗、彼の佛に無量無邊の聲聞の弟子あり皆阿羅漢なり、是れ算數の能く知るところにあらず、諸の菩薩衆も亦復かくの如し、舍利弗、彼の佛の國土には是の如きの功德莊嚴を成就せり

とある、淨土の聖衆としては數限りもなき聲聞が居り、其聲聞は阿羅漢果のものであり、其數は算數の及ぶ所でない、菩薩の數もまたさうであるとしてある。そうして上に依報莊嚴を示し、今正報莊嚴を示した、これで依正二報の莊嚴が終る、此莊嚴は、いづれも彌陀佛因位修行の功德として顯現されたものであるから一節ごとに功德莊嚴を成就せりと結ばれたのである。

所が今淨土の聖衆として聲聞と菩薩が擧げてあるが、聲聞と云ふのは佛、教導の聲を聞いて道を修するものであり、菩薩と云ふのは佛道を求むる勇猛の志あつて、自利利他の行を修しつゝあるものを云ふのである、故に菩薩に比すると聲聞は自利だけに止まる下根のものであるとされ其類の中での利根である緣覺と合せて二乗と呼ばれて、此者は成佛と云ふことには、甚だ困難な地位に居るものとされてある、其の聲聞中では阿羅漢が最上位である、阿羅漢は無學の位と云はれて、已に修學辨成して學ぶべきものが無いと云ふ極位である、淨土の聲聞は皆その阿羅漢である、又菩薩のことは今は云はれてないが、次の節に皆阿耨跋致であり、而も多くは一生補處であると示されてある、阿耨跋致(Avīṇavaṇṇīya)は梵語で、譯して不退と云ふ、これは佛道修行の過程に於て、おぼろげにも眞如そのものに直接して佛果に於て退轉せざる位になつたのを云ふのである、其中で一生補處と云ふのは、其一生で根本の無明までを斷盡し、次生には佛處を補ふと云ふ位であつて、菩薩の最高位である、それで聲聞としては阿羅漢と云ふ最高位であり、菩薩として不退位にあるもの、而も多くは一生補處の最高位であると云ふので、其聖衆がいかに勝れた質の者のみであるかと云ふことが分り、而も其數は無量であると云ふことで、全體に於ていかに盛んであるかと云ふことが分る、即ち其質に於て量に於て誇るべきものであることが示されて居るのである。

所がこゝに問題の起るのは、前來屢々淨土の聖衆は佛と同一の悟りであることを云うた、佛の光壽二無量でさへ、

其人民に及ぶ所に彌陀佛の特色があるのに、聲聞とか菩薩とか、それがたとひ、その高位であつても、此の如き階級の存するのは矛盾ではあるまいかと云ふことであるが、これは古來、因順餘方だと云はれてある、因順餘方と云ふのは、『大經』に説かれてある淨土に聲聞、菩薩、天、人の差別の存在する所以の説明である、經文には

其の諸の聲聞、菩薩、天、人、智慧高明にして、神通洞達せり、咸同じく一類にして形異狀なし、但餘方に因順するが故に天人の名あり

とある、其餘方と云ふのは限ることはないが、正しくは此世界である、此世界の者へ理解せしめ、此世界の者を憧憬せしむる爲に、此名が入用である、全然此の世界とかけ離れた説であると理解もできず、憧憬もしない、それで此世界に存在する事態で説かれたのである、故に説かれた如き差別が嚴然として存在して居るのではなくて、咸同じく一類であるとするのである、所が、其の一類なるものを餘方に因順してかくの如く説くには何か理由があるかと云ふに、古來いろ／＼の説があるが、其中に居處に就て云ふ、例へば空中を飛行するものは天と云ひ、地上にあるものは人と云ひ、佛に隨ひ聽法の坐にあるものは聲聞、自由に他方世界に到りて二利の行を修しつゝあるものは菩薩と云ふが如きであると云ふ説があり、又舊名を存して云ふ、即ち人間世界から來たものは人と云ひ、天上来たものは天、聲聞であつたものは聲聞、菩薩であつたものは菩薩と云ふとする説であるが、共に意味のある説と思はるゝ、居處に就て云ふのは、つまり其仕事によることゝならう、極樂世界でも仕業はそれ／＼別があらう、それではなくては面白味はない、而も其別のあるまゝで而も同一類であつて別がない、こゝに一のまゝで二、二のまゝで一、平等のまゝで差別、差別のまゝで平等と云ふ理想世界の有様が窺はるゝ、其差別の事態を此世界に因順して吾人へ説き示された

のである、吾人の世界も實は此の如くであると、まことに尊いのであるが、事實はそれに遠かること甚だしいのが、此地上の悩みであると云はねばならぬ、又、舊名を存すると云ふ説は、いかにも古い好ましからぬ差別現象を永久に存するやうであるが、これは、それらの人が等しく此の平等の世界に入り來つたと云ふことを明かにする意味に於て意義がある、つまり此の淨土には如何なる階級にある人も入ることができると云ふことが明かになるのである、これで淨土の内容の豊富さと誰れもが來りうることを明かに理解せしめて、かれを憧憬せしむると云ふ、説の使命が果さるゝことゝなるのである、かやうな意義からして、差別の名があり、かうした説があつたのである。

〔註〕(一)此の經文に就ては「彼の佛及び其の人民の壽命」とあるべきを倒語法を用ひたものと解する説と、彼の佛の壽命及び其の人民の壽命」と上の壽命の字が下まで及んで二度讀む意味であるとする説があるが、いづれでも通じるが、後の説が標かであらう。

(二)無量、無邊、阿僧祇と云ふものはいづれも大数の名である、阿僧祇(Aśokani)は無央數と譯す、央は盡の意で盡くることなき數の義である、今この三つの名で限りなきことを顯はしたのである。

(三)「唯信鈔文意」(眞宗法要本二五丁)

(四)「三部經釋」(和語燈十五丁)

(五)「顯名鈔」(眞宗法要本十九丁七)

(六)「法事讀」下 十丁

(七)「顯名鈔」(眞宗法要本十九丁七)

(八)「末燈鈔」(眞宗法要本三三四丁) 慶信の消息に出づ

(一〇) 阿羅漢(ārahant)は殺賊、不生、應供と譯さるゝ、煩惱の賊を殺害して、迷の世界に生ずることなき身になり、人の供養を受くべき資格あるものと云ふ意、略して羅漢と云ふ、聲聞の最上位を云ふ。

第七章 衆生の因果

一、往生後の果相

これまで、此の短い經典として多くの文字を費して淨土の莊嚴相が説かれたが、これはたゞ客觀的の一實在物の沙汰をしたゞけの意味ではない、それが吾々の往生すべき世界として、吾々の主觀の上に生きたものとして顯はすために説かれたのである、吾々は其世界に往生したときに於てどうなるか、これが正宗分の第二大段に衆生の因果を明すに當つて、先づ説かれた衆生、往生後の果相である、經文にはそれを

又舍利弗、極樂國土には衆生、生るゝ者は、皆これ阿鞞跋致なり、其の中に多く一生補處あり、其數甚だ多し、これ算數の能くこれを知る所にあらず、たゞ無量無邊阿僧祇劫を以て説くべし

と示されてある、此の一節は淨土の聖衆の無量なることをたゞへた、莊嚴相だと見れば見られないことはない、前に淨土の聖衆の無量が説かれてあつたのは、もとから淨土に在る舊住の聖衆であり、今は新たに往生した、新往の人たちであると思はれないことはないが、それと同時にこれあるが爲に、衆生は發願して往生を求めたとなれば、往生後の果相である、深信の『阿彌陀經略記』に

此の文、前に準すれば、傍に國土の莊嚴を顯はし、後に望めば、正しく發起の本懐となす

とあるのは、この二つの意味のあることを述べられたものであるが、此の一節の文字としては下に屬して居り、下に

説く往生の因種の目的となるものであるから、大體を生後の果相として説明する、

往生したらどうなるか、それは阿耨跋致アビロバチであり、多く一生補處であるといふのである、阿耨跋致(avivartanīya)は不退と譯されてあるが、不退と云ふのは佛道修行の過程である菩薩位に於て、明瞭でないまでも、眞理そのものに直面してそれを把握した位であつて、眞理そのものに直面すると退轉することがない、それで不退と云はるゝのである、その位は初住(二)であるとか初地(三)であるとか、種々の説があるが、いづれにしてもよろしい、兎に角、菩薩が當面の目的として居る、眞理に直面した位である、ところがそれは佛道修行の過程では實は高いノ地位で、凡夫がたやすく願ひうる所ではない、今淨土へは凡夫が往生しなくてはならず、またするのである、凡夫がするとすれば、そんな高い位ではないだらうと考へて、處不退だといふ説もなされてある、それは淨土は、佛常にまし、聖侶常に提携して、惡緣更にない處であるから處として退轉しないのであると云ふ説である、しかし極樂無爲涅槃界と云はるゝ、佛の世界にいつたのである、處だけでなくして、生れた者も其の世界のものになりきつてこそ、佛の世界に生れたと云ふことができよう、高くてよろしいではないか、そこにこそ、他力があるのではあるまいか、一生補處と云ふのは、一生の後、佛處を補ふ位といふので、佛のすぐ次の位を云ふのである、それでこれは菩薩の最高位である、皆不退位で、多く一生補處であると云ふのは往生した人が初は不退位から、一生補處に進むことを云つたものである、大無量壽經(一)に出て居る阿彌陀佛の第二十二願に

他方佛土の諸の菩薩衆、我國に來生せば、究竟して必ず一生補處に至らん

とあるのと同じであらう、所が先きに佛の光明無量、壽命無量の徳は、其人民にまで及んで、淨土に生れた無量の衆

衆は悉く佛とひとしく、光明無量、壽命無量となることを云つた、佛とひとしい者は佛である、然るにそれが不退とか、一生補處とか云ふ菩薩位にあると云ふことは、どうしたのであらうかと云ふに、これは其の佛とひとしいまゝで、法味を味ひ、衆生を化益する爲めに活動相を示現して居ることを云つたものである、菩薩の法式は自利利他の爲めに飽まで活動することである、それで菩薩位と云へば活動相である、極樂淨土は阿彌陀佛の世界であるから、佛としては阿彌陀一佛であつて、他は悉く此の如く菩薩として活動して居る、しかし其まゝで佛である、佛であるまゝで菩薩である、こゝに眞に統一された矛盾のない衝突のない世界ができて居る、極樂世界の菩薩の筆頭である觀世音に就て、善導は「觀音の相好、佛と異無し、慈悲救苦最も強しとなす」と云ひ、また「觀音菩薩大慈悲、已に菩提を得て捨て、證せず」と云はれてある、相好が佛と異ならず、已に菩提を得て居りながら、それが菩薩として救苦の事業に没頭する、こゝに觀音の觀音たる使命がある、佛が佛ならず、菩薩が菩薩ならず、佛にして菩薩なり、菩薩にして佛なりの状態である、淨土の聖衆はひとしく此の如きであらう、こゝにまた淨土の淨土たる價値が展開されて居るのである。

經文は、近く上の如き淨土の果相を受けて、かくの如きの説を聞かんものは發願すべしと勧められた、即ち舍利弗、衆生聞ん者は、應當に發願し、彼の國に生れんと願ふべし、所以はいかん、是の如きの諸の上善人と、俱に一處に會することを得ればなり

とある、佛が往生後の果相を説かれたのは其意、此の發願を勧むることにあつた、我等をして其聖衆の一員たらしめんとしてあつた、支那南京、棲霞寺の千佛洞の佛體を刻んだ、工匠蘇奇は、自像を千佛の一として刻んで、千佛に

加はらんことを祈つたと云ふ傳説があるが、今、釋尊は吾等をして、淨土の聖衆の一員たらしめんとして、淨土の聖衆の相狀を語られ、さうして我等に發願を勧められ、其理由として、此の如き上善人と俱に一處に會することを得と示された、俱會一處、なんと尊い語ではないか、吾等は孤獨を嫌ひ、賑かに一處に住まひたいと念願する、併し人生にはそれが許されない、また其一處に住ふのは徳のある、智慧のある、温い潤ひのある人とでありたい、併し人生はまたそれが許されない、こゝに於て俱會一處の彼岸に發願する、吾等に此の發願がなかつたら、人生の生存は無意義とならう、此の發願によつて進む所に人生の意義は發生する、善導はこの經文に就いて、切實にそれを吾人に勧めらるゝ所があつた。

釋迦如來、身子に告ぐるは、即ち是れ普く苦の衆生に告ぐるなり、娑婆六道は安處に非ず、冥々たる長夜の闇の中に行く、聖化と同居すれども相識らず、動すれば瞋毒を生じて無明を闢はしむ、此の無明の爲に六道に繋がる、愛憎高下いづれの時にか平かならん、既に善業の生死を排ふことなし、貪によつて罪を造つて未だ心、驚かず、此の人皮につゝめる臙骨に狂るかされて、三塗に自ら入つて争ふべからず、我等之を聞いて心髓痛む、誓願して頓に世間の榮を捨てん、普く願くば心を廻して淨土に出せよ

と、實に現實人生の醜惡悲惨なる状態にめざめるならば、どうして淨土に願生せずと居られようか、此の發願こそ人間向上の第一歩である。

二、執持名號

諸の上善人と一處に會する果報を望んで、淨土を願はうとすると、そこにすぐ起る問題は、どうしたら其の淨土へ往生ができるかと云ふことである、これが生因即ち往生の因種の問題である、今經文にはそれに答へて、少善根福徳の因縁では往生せられない、唯執持名號の一法のみ往生することができると、最も簡明率直にそれを示された、即ち舍利弗、少善根福徳の因縁を以て彼の國に生るゝことを得べからず、

舍利弗、若し善男子、善女人あつて、阿彌陀佛を説くを聞いて、名號を執持すること、若は一日、若は二日、若は三日、若は四日、若は五日、若は六日、若は七日、一心不乱ならん、其の人、命終の時に臨んで、阿彌陀佛、話の聖衆と、其の前に現在したまふ、是の人終る時、心顛倒せず即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得。

と説かれたのがそれである、大體經説のあるのは、種々な事が説き示されはしようが、結局は衆生をして、それを信受し奉行して、往生とか成佛とかの因種を積ましめようとするのである、即ち結果に對する原因を作らせようとするのである、それで此の生因の問題は經典としては實際的に最も重要な點である、經典當面の部旨はなにゝあらうとも、最終の目的はこゝにあるべきである、それで此の經典でも此一段は殊に注意しなければならぬ。

生ることのできない少善根福徳因縁とは何であらうか、少善根は多善根に比ぶれば價值が低いことは云ふまでもないことであり、淨土が優れた世界だとすれば少善根では都合の悪いことは云ふまでもないことであるが、しかし多少は比較の上にあることであるから、少もより少なるものに比ぶれば多であり、多もより多なるものに比ぶれば少である、何を分界として多少を分つのであらうか、こゝで考へねばならぬのは往生せんとする極樂世界とは如何なるものであるかと云ふことである、上に極樂世界の莊嚴相のことは説かれてあつた、七重の寶樹があり、八功德の水

がたゝへ、雑色の鳥が囁り微風吹いて天樂を奏して居ると、それは妙なることは妙である、しかし、それは此の地上に於ても、必ずしも得られないことではない、極樂でなくてはならないものは、それが彌陀の變化である所に於て、彌陀の變化であると云ふことは、眞如、法性、無爲、涅槃の絶対一の世界であることをいつて居るものであらう、それで此の世界へ到らんとする因はまた絶対一のものでなくてはならない、所が相對差別の世界に局執して居る我等は、勉むれば勉むる程、勵めば勵む程、寧ろ執着の情は強く、差別の見は堅い、我がなし、我の所有する善根であると云ふ、我、我所の見解は強い、此の見解の上にある善根は如何に積めばとて、差別世界のものであるから限りがある、限りあるものはどうしても小さい、少善根とはこれをいつたものである、吾々が私の自力を働かして居るあひだの善根は、どうしてもこれを免かるゝことはできない、それで善導はこの意味を

^(六) 極樂は無爲涅槃界なり、隨緣の雜善恐らくは生れ難し

と述べられてある、無爲涅槃界とは眞如一如の世界である即ち絶対一の世界である、故に我等が所緣のまに／＼修した自力隨緣の善根は一切悉く相應しないものである、即ち定善とか散善とか八萬四千の法門とか云はれてある、總ての善根が彼の淨土とは相應しないのである、それは自力の善根であるからである、自力は差別局執の見解にあるものであるから、絶対一の世界とは相應することができない、そうなると今の少善根と云ふのゝ對する所の多善根は、實は相對上にある多ではなくして絶対のものでなくてはならず、それに對して少は相對差別上にあるものが意味されて居るのである、これはつまり單に人間が所有して居る倫理上の善、そのものを極樂の宗教の世界から否定し去つたのであらうと思はるゝ。

かく少善根を否定し去つて、彼の無爲涅槃の世界に相應するものとして與へられたものは何であつたらうか、それは唯、一法であつた、彼の世界がもしも單なる差別の世界であつたならば、二の世界であつたならば一法ではなかつたかもしれない、けれども絶対一の世界である、そこに到るに二種も三種もの法がある譯がないからである、そうして其の一法は阿彌陀佛を説くを聞いて名號を執持することであつた、阿彌陀佛を説くとは、其の佛の御名が説かるゝことである、其の説かるゝを聞いてこれを執持する、執持とは心に信じ、口に稱へることであらう、これが即ち念佛である、善導はこれを

^(七) 故に如來、要法を選んで、教へて彌陀を念ぜしむるに、專にして復た專ならしむ

と讃述されてある、釋尊、念佛の一法こそ、往生の要法であると選定されたと云ふのである、智圓は其執持の意義を解釋して

^(八) 執持名號とは、執とは謂く執受、持とは謂く任持なり、信力の故に執持心にあり、念力の故に任持して忘れず

と云つて居る、御名を聞いて信じ、信じて思ひつゞけ口に稱するのとしたのである、親鸞は

^(九) 執の言は心堅牢にして移轉せざることを彰はす、持の言は不散不失に名づくるなり

と解釋して居る、これは心念堅固にしてかはることなきことを云はれたものである、いづれにするも、御名の謂れを聞いて堅く信じ、其の信は聞く所御名なるが故に、口に出で、稱名となつて、一日乃至七日と相續することを云つたものである、所で其の信じぶり、執持しぶりはいかゞであるか、知旭^(一〇)はこれについて理持、事持といふことをいつて居る、理持とは我心が其のまゝ佛であると云ふ、形而上學的な理の觀念の上に立つて、其の佛の御名を稱ふること

あり、事持とは、單に稱ふれば功德ありとして、稱ふることとして居る、併し、五濁惡世の衆生、強い相對差別の見解に執着して居るものが、どうして、眞實の意味に於て其のまゝ佛と體驗せらるゝであらうか、また單に稱へて、それに功德ありとする、信じぶりは、淺深の差こそあれ、此の經を註釋し、此の經を信する者の中には少なくないが、若しそれならば、一つの有限相對の少善根であつて、それを否定した上にある絶對無限のものではないのである、此の經で絶對無限のものは、今聞く所の阿彌陀佛である、佛はそれ自體が、光壽無量の絶對無限でまじ／＼て、其の人民も亦さうである、即ち衆生の上に於ても亦絶對無限である、これこそ、衆生救済の本願成就の佛として衆生を救済さるゝ所以である、これが佛の佛たる所以で、それが御名に顯はされたのである、それで信することも稱ふることも、それが其の儘に顯はれたものでなくてはならない、其の儘に顯はれたと云ふのは、其のすがたのまゝに如實に認められ、如實に持たれたのである、つまり眞實に絶對無限なるものは佛に於てのみあつて、それに同化さるゝのであるから、衆生から云へば佛の他力に救済されて眞に絶對無限たることができるのである、佛のすがたのまゝが顯はるゝのは、即ち佛力救済のまゝが顯はるゝのであり、認めると云ふも持つと云ふも、他力救済を認め持つことである、即ち他力に救はるゝことを信じ稱ふるのである、故に信じぶり、稱へぶりと云へば、他力救済を仰ぐことの外にはないのである、稱へた自力の功を認めることは、全くこれと反することである、その反するものは少善根福徳因縁として否定さるゝのである、阿彌陀佛の説かるゝを聞くは、他力救済の説かるゝを聞き、其の意味のある御名を信じ稱ふることが執持するのである、そこで雜多の少善根にあらざる、唯一の絶對無上の善根が顯示されたのである。

其の御名を持つことが若しは一日乃至若しは七日と延びゆく、それは持つことのおのづからなる相續である、一日

生きるものは一日、七日生きるものは七日、一年生きるものは一年、十年生きるものは十年である、法然は

若一日乃至七日とは是れ念佛三昧を修する時節の延促なり、文は但一日七日を擧ぐと雖も意は一生乃至十聲一聲等を兼ね

と解釋されてある、また其の法語には

いけらば念佛の功つもあり、しなは淨土へまいりなん、とてもかくても此身には思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば
死生共にわづらひなし

とある、一生でも十年でも一年でも一月でも一日でも十聲でも一聲でも、命のあるに任せて、多くも少くもさらに、拘る所のない、全くこだはりのない生活、これが他力救済の御名を執持するものゝ生活のすがたである、これがまた一心不亂のこゝろもちである、美しい花を見る、心は散らないか、それは散る、楽しい聲を聞く、心は直に移る、悲しい事件に出會ふ、心は曇らざるを得ない、嬉しい事實を見る、心は勇む、何事につけても心は散亂する、煩惱は起る、併しながら、それがあるがまゝに、他力に救はるゝ一色となつてしまふ、他力のまゝの色である、若しも自力にして意馬心猿を制御するものならば、散亂する心は一心不亂ではない、されども散亂する全體が、他力に抱擁されて他力のまゝの一色となる、他力救済の御名の色其のまゝに全生活の上に顯はれて統一して居る、こゝに一心不亂があり、念佛三昧の生活がある。

三、來迎と往生

かく念佛の生活に一心不亂の行者が命終の時に臨むと、阿彌陀佛は諸の衆衆たちと、其の人の前に顯現さるゝ、これを來迎と云ふ、死は人生の最後である、最後が美しかれと祈るのは人情である、殊に死は更に永遠の世界、未知の世界への旅立ちである、かよはい人間としては最も重大な關門である、其の死の場合に於て、佛菩薩が來迎せられて、淨土へ引接せらるゝと云ふことは、最も美しいことであり、賑かな力強いことである、さればこそ、淨土教徒の多くはこれに強い憧れを持つて居た、源信和尚の如きは迎接の眞似事をして法悦にしたられてあつた、淨土教藝術として、來迎の繪畫が少なからず作り出されてあるのもかうしたことからである。所が他力の一色となつた念佛の行者、執持名號の人は、佛とはなれぬ人でない、佛の光明に攝取され、佛の御心につゝまれたものである、されば佛と共に住ふことは臨終をまつて、始めてあるのではない、法然上人は

若し人、佛を念すれば、阿彌陀佛、無數の化身、化觀世音、化大勢至、常にきたつて此の行人のところに来りたまふ、念佛の草庵、隘せましと雖、しかも恒沙の聖衆雲のごとくに集り、菴羅園アムラノの華座に同じ、三昧の道場、狹せましと雖、しかも無數の賢聖、側塞して、靈鷲山の菩提に等し、

と讃仰されてある、平生此の如く、無量の佛菩薩に圍繞せられて居る、其の佛菩薩が臨終の時、顯現して共に淨土へ赴く、これが來迎である、それで此來迎は佛と離るゝことを得ない念佛行者が有する、必然の利益である、念佛行者は佛と離るゝことを得ないから、常に佛と共に住し、佛と共に住するから佛と共に佛の淨土へ往生し、佛の淨土へ往生するから佛と同じく光壽無量の覺りとなり、佛と同じく涅槃界に遊び、其の上に限らなき自由な活動相を展開してゆくのである。

四、念佛の自他力

已上の如く衆生の因果としては、念佛によつて往生すると示されてあるが、此の經の此の念佛に就て、獨特な一の見方がある、それは親鸞聖人の隱顯と云ふ見方である、隱顯と云ふのは、此の念佛往生に隱と顯即ち裏と表との二意があると見た、其の表の顯の方では此の念佛は純眞な他力でない、自力の不純をもつて居る念佛である、裏の隱の方では純眞な念佛、即ち他力の念佛が示されてあるとするのである、自力の念佛と云ふのは自分が佛の御名を稱へたのに功を認めて、これを積み重ねて、往生しようとするのである、それで一日よりは二日、二日よりは三日、三日よりは一年、一年よりは十年と功を積み重ねようとする、其の自力を以て策勵する心の勇猛なのが一心不亂であつて、かくして稱名することと、定善散善の諸行と比較すると、彼は少善根であり、これは多善根であつて其の功德大に勝れて居るのである、他力の念佛と云ふのは、佛の他力によつて救はることを御名によつて聞き、それを信じそれを稱へて、唯他力を仰いでるのである、上の節に述べた意味はそれである。

所が淨土教の後の學匠の中には、念佛と云へば無論自分に稱へて佛の力がそれに加はるのであるから、自力の點も全くないではない、また大に他力でない譯ではない、それが念佛の自體のすがたであつて、すべての念佛はそれであるから、念佛の中に自力の念佛とか他力の念佛とか云ふものがあるのではないと云ふ人もある、しかし法然も

他力(二四)の念佛は往生すべし、自力の念佛は全く往生すべからず

たゞ一念二念を唱ふとも自力の心ならん人は自力の念佛とすべし、千遍萬遍を唱ふとも、百日千日夜晝はげみつむ

とも、偏に願力を憑み、他力を仰ぎたらん人の念佛は聲々念々しかながら他力の念佛にてあるべし、されば三心を發したる人の念佛は日々夜々時々尅々に唱ふれども、しかしながら願力を仰ぎ他力を憑みたる心にて、唱へられたればかけてもふれても、自力の念佛とはいふべからず

と云はれてあり、また事實について考へて見ても、安心次第でよほど其の様子がかはつて来るから、念佛ならばいつも同じに取り扱ふことはできない、そこには自力の功を認めて居るものと、他力をひたすらに仰いで居るものと別はあらう、親鸞は此の經の表に於て、其の自力の念佛が存在して居ることを見、裏に純眞な他力念佛を含めて、先づ自力念佛を興へ、更にこれを奪うて他力念佛に轉入せしむるものと見たのである、これは親鸞獨特の見解である(二六)轉入の義から見て、此の經の説かれた所以が二十願眞門の開設にありとした見方であるが、此の經に於て、かく見なければならぬ點はどこにあるのかと云ふと、それは『觀無量壽經』に准じて知ると云ふのである、此の經の念佛は、『觀無量壽經』最後の歸結として付屬された念佛であるが、其念佛は九品の中の下三品の惡機に對して興へられたものであるが、それは見方次第では自力にはげむ念佛であつて、諸善の中でも餘り地位の高くないものとも見られ、また付屬さるゝ所では下品の惡機の唯一解脱の法であつて、佛の本意の存するものとも見らるゝ、そこで其二つが表裏隱顯となる、それに准じて見ると今もそれがあらうと云ふのである、さう考へて見ると此の經の念佛の説き方にも純眞さが缺かれて居る點がないでもない、それは一には此の經の念佛は少善根を否定として、多善根として説かれたものである、これを襄陽の石經の文字に見ると明かに「多善根福徳因縁」と説かれ、それが元照の『阿彌陀經義疏』に載せられたものによると「多功德、多善根、多福徳因縁」とさへなつて居る、少に對した多であると相對上にあるもので、絶

對の佛のそのまゝが顯はれ、それが仰がれて居るものと見へない、そこから見れば聞くことも佛の全くが聞かれてなく、執持名號も己が力をはたらかすものであり、一心不亂も強く力むことであらうし、一日乃至七日も功を積まんとすることゝなるのである、二には其の往生の相として擧げられた臨終の來迎が、若し平生の念佛が尙ほいまだ完全に佛と共に住むことでなくして、往生が不定であつて、臨終の來迎を見て往生に安堵し、又は其の力によつて臨終の障りを除いて往生をしとげようとするのであれば、そこは尙ほ充分に他力を仰いで居ないと云ふことになる、かような點から見ると、この説き方には尙ほ一抹の曇りをかけることを許されてあるかに見らるゝのである。

所で念佛に於て自力他力のあると云ふことは、求道上切に注意すべきことである、稱へさへするならばといつて稱へることは結構であるが、それが稱へることに功を認めて、己が力を察するならば、念佛の本義に遠ざかるのである、信ずることが他力を憑むのであれば、稱ふることも他力を稱へるのでなくてはならぬ、他力を仰ぐ所にこそ淨土教の特色がある、親鸞の隱顯の見方は尙ほ種々な意義を顯はすであらうが、特にこの同じ念佛にも自力他力の分ることゝを明かにして、少善根から多善根に進んだものは、更に絶對善にすゝましめ、淨土教の眞髓を把握せしめ、宗教の究竟地に到達せしめようとした點に於て、周到な注意の拂はれたものと見ねばならぬと思ふ。

五、自證 知見

佛は執持名號の法をかく説き已つて、自らこれを證明するの語を加へた、これを法然は「自證の知見を以て勸進す」といつて居る、其の語は經文に

舍利弗、我是の利を見るが故に此言を説く、若し衆生あつて、是の説を聞かん者は、應當に發願して、彼の國土に生ずべし

と説かれ、唐譯には

我是の如き利益安樂大事因縁を觀、誠諦の語を説く

と説かれてある、法然は此事を説明して

自證の知見をもつて勸むとは、我は是れ法王、法に於て自在を得たり、淨土の依正、往生の因果に於て徹視了々たり、我れ明に其の勝利を見る、是の故に之を説く、汝等何んぞ之を信ぜざる、若し有信の者はまさに發願すべしと云はれてあるが、これは實に力強い語であつて、釋尊が自ら徹見した事實であつて、疑ふべからざるの眞理だとされたこと云ふのである、釋尊の徹見した事實とは釋尊の所證の法と云ふことである、釋尊は法を覺つて佛となつた、其法こそ釋尊の智慧を造り慈悲を造つたものであるから、法そのものは智慧であり慈悲である、それが衆生の前に救済のすがたを顯現したのが阿彌陀佛であるから、阿彌陀佛は、法に於て自在を得た法王釋尊に於て了々と徹視され、吾人の前に展開されて居る、それで其所説は眞理である、眞理なるが故に、一切衆生は信ぜざるを得ないのである、已上に於て釋尊は阿彌陀佛と其の世界と、其の世界へ往生する道とを説き示されて、自らの説としては、これが自ら結びとなつて居る。

〔註〕(一) 凡天より佛への過程に五十二位を立つれば第十一位

(二) 五十二位の第四十一位

- (三) 『般舟讚』二三 丁右
- (四) 『往生禮讚』三七 丁右
- (五) 『法事讚』下 丁左
- (六) 『法事讚』下 丁右
- (七) 同上
- (八) 『阿彌陀經疏』(淨土宗全書五六四頁)
- (九) 『教行信證』化土卷本二〇 丁右
- (一〇) 『阿彌陀經要解』の說
- (一一) 『阿彌陀經釋』(漢語燈三一〇) 丁右
- (一二) 法然上人行狀畫圖卷二十一、卷二十八
- (一三) 具さに菴沒羅園(Anuradha)佛在世に印度吠舍釐國にあつた樹園で、それに精舎があつて、五精舎の一に數へられてあつた、菴沒羅女の佛に獻じた園である。
- (一四) 『念佛往生要義鈔』(和語燈二二) 丁二
- (一五) 『七箇條起請文』(和語燈二一四) 丁四
- (一六) 親鸞は『教行信證』に於て、阿彌陀佛の四十八願中、衆生の往生の因を顯じたものが十八、十九、二十の三願あるが、其の三願は、聖道門から、十九願の自力諸善の往生と轉じ、それが更に二十願の自力念佛に轉じ、それが遂に十八願の他力念佛に轉入するものと見た説。

第八章 諸佛の證護

一、六方諸佛

釋尊はこれまでに、吾等が往生すべき彼岸の世界たる、淨土の莊嚴相と佛の功德とを説き、更に吾等が其の世界へ往生する方法を示して、自己の確信を以て證明の語を加へられた、これで此の經正宗分の第二大段が了はつた、已下は第三大段であつて、其の經説に向つて六方の諸佛たちが、擧つて證誠し、其の證誠する佛は其の經を信する人を擁護し、かくして、釋尊により諸佛により、等しく支持されたのが、此の經獨特の權威であることを示された、此の經獨特の權威は彌陀佛の權威であり、念佛の權威であつて、此法こそ獨り高く秀する尊高の法にして、吾等は必ずや信心を起さねばならぬことを示されたのである、其の六方諸佛の證誠は經文に、先づ東方の諸佛に就て

舍利弗、我今者、阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如く、東方にも亦、阿閼鞞佛、須彌相佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛、かくの如き等の恒河沙數の諸佛有て、各々其の國に於て廣長の舌相を出し、徧く三千大千世界に覆ひて誠實の言を説きたまはく、汝等衆生、當に是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべしと

と示され、次に南方世界に日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛等、西方世界に無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛等、北方世界に焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛等、下方世界に師子佛、名聞佛、名光佛、達摩佛、法幢佛、持法佛等、上方世界に梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛等、いづれの世界にも恒河沙數の諸佛あつ

て東方と等しく證誠したまうたと、詳しく繰りかへして説かれてある、所が唐譯になると十方となつて居る、それは此六方の次に東南方に最上廣大雲雷音王如來等、西南方に最上日光名稱功德如來等、西北方に無量功德火王光明如來等、東北方に無數百千俱胝廣慧如來等のまたいづれも恒河沙數の諸佛あつて、また、等しく證誠したまふことが説かれてある、これはつまり原典が異本であつて、唐譯の方が詳しくなつて居たものと思はれる、しかし結局、具略の差であつて、六方と云ふも十方と云ふも一切の方角を盡したことである、さうして其の各々の方角に恒河沙數の佛ありと云ふは、恒河(ゴウガ)は印度第一の大河で、而も沙河であり、佛遊化の地域にあつて弟子も常に見る所であると云ふようなことから、數多いことを譬ふる場合、つねに其の沙の數を以てせられた、それでつまり、無量の佛がましますと云ふことで、結局一切の世界の一切の佛が證明せらるゝと云ふことをいつたのである、さうして並べてある佛名に就ても、中には其の佛の因果、徳相の知れる佛もあるが、知れない方が多い、しかし佛名は『佛名經』とか『千佛名經』とかいふ、頗る數多い佛名の説かれてあるものがあるが、其の佛の由來因縁は知れなくとも、其の佛名そのものを讀み味ふて見るならば、そこに云ひ知れぬ、尊さが知らるゝものである、所がこゝで注意して置くべきは、西方世界に無量壽佛と云ふのがあるが、あれは此の經に正しく説く所の阿彌陀佛のことであるか否かと云ふ問題であるこれに就ては古來、同一の佛であるとする説と、同名異佛であるとする説とがある、同一の佛とする説は、西方の無量壽佛と云へば阿彌陀佛と異なるべき筈がない、しかし自らが自らを讚歎したり證誠したりすることは、自らの善を誇るやうで、如何はしいと思はるゝが、佛が衆生化益の爲に適當な方法を取ること、凡夫が名利の爲にしかすると同じに考へてはならぬとし、異とする説は同名異佛は多いことであるから、證する佛と證せらる佛とは異佛と考へる

が穩當だと云ふのである、どちらでも別に差しつかへはないが、やはり異佛と考へるがよからうと思ふ、佛名の多數擧げられてある所には同名の佛が少くない、現に此の經にも、南方にも上方にも大焔肩佛と云ふのがある、阿彌陀佛に就ては「不可思議功德諸佛所護念經」(黃軼三)には西方に六十三佛を列ねて其の第十三番に西方極樂世界阿彌陀如來があり、また第二十四番、第六十一番にも阿彌陀如來があり、其の他、無量明、無量光、無量光明など、云ふ類似の名が多數にある、かように同名異佛の例は多い、また「大經」から見ると阿彌陀佛が本願に於て諸佛から讃められようと願はれてある、それが實現したのが、今の證誠であるとすれば、阿彌陀佛自身がやらない方が理が通るようである、また翻譯者羅什は、此の經では阿彌陀佛の梵名を以てし、譯名の無量壽とか無量光とか云ふのは用ひて居ない、その邊から見れば今の譯名の無量壽は異佛と考へて、そうしたものと思はるゝこれらのことから考へると異佛とした方が穩當のやうである。

さうして六方とか十方とか云ふのは、どの世界を中心としての方角であるかと云ふのに、此の世界と云ふのと、西方極樂と云ふのと二説あるが、今此の世界で釋尊が説かるゝのであるから、正しくは此の世界を中心としてのことであらう

また其の諸佛たちのまします國土は穢土なりや、淨土なりや、穢土なれば應身の佛であり、淨土なれば報身の佛となるがいづれであらうかと云ふ問題があるが、これはいづれにも通ずると考へて置くべきで、限るべき理由はないのである、報身であらうと應身であらうと、此の場合意見の相違があるべきではない、此の世界に於て釋尊が讚歎せらるゝが如く諸佛もなすと考ふれば、當然穢土に於ての應身佛であつてまた出世の本懷としてなしつゝありとすべく、

また唐譯に「自佛の淨土に住して」とあるのは淨土と明言してあるのである、要するに説かるゝ阿彌陀佛と、説く釋尊とを除いた、餘の一切の佛であつて、それ等が等しく讚歎し證誠するのである、かく一切の佛が讚歎し證誠すると云ふことは、其法の眞實、如實、不變、常住を顯はすものに外ならないのである。

一、證誠の相狀

諸佛の證誠はいかになされるのであるか、それは各自の國に於て廣長の舌相を出して、三千大千世界を覆ひて、汝等衆生、稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべしと誠實の言を説かるゝのである、その廣長の舌相と云ふのは佛の有たるゝ、三十二相の一であつて、因位の間、妄語等を離れ眞實のみを語つたのによつて莊嚴された相好であつて、大事の場合には三千大千世界を覆ふこともできると云ふのが、佛の此の相である、これは印度の風俗の舌を出して眞實を誓ふと云ふやうなことから考へられたのであらうが、舌で覆ふと云ふことは眞實を承認せしむることゝ考へらるゝ全世界を覆ふと云ふことは、全世界に承認せしむる眞實を語る舌だと云ふことであらう、佛は吾人の如き局限された世界に居る人ではないから、一切が自由であり、普遍である徳は有して居られやう、しかし今の場合には全世界一切の有情が信ぜざるを得ない眞實を語つて居らるゝことに於て、特に意義があると思ふ。

其の語らるゝ相手の汝等衆生と云ふのは、其の佛の國の衆生である、眞實は何れの世界にも存在する、此の法はただ此世界に於てのみ語らるゝ、一部のものでもなく、また或時にのみ語らるゝ、一時的のものでない、すべての世界に於てすべての時に於て語られつゝある眞實そのものであり、一切衆生らか等しく、よつて解脱すべき法である。

其の語らるゝ言葉は稱讃不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべしと云ふのである、其の經は何が意味されてあるか、今釋尊が、阿彌陀佛を稱讃した此の阿彌陀經である、即ち御名に顯はされて居る阿彌陀佛である、故に釋尊はじめに「我今、阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如く東方にも亦……」と云はれた、不可思議功德は阿彌陀佛の功德である、阿彌陀佛の功德は何が不可思議であるか、其の佛も國土も、その莊嚴の一々も悉く不可思議ならざるものはない、其の光明は無量である、壽命は無量である、其の人民もまた無量の光壽がある、無量と云ふことは吾人にとっては不可思議の世界である、吾人は相對有限の世界に居るから、無量と云ふことは、吾々の世界を超越し吾人の思議することを絶した世界であつて、實に不可思議である、また其の國土の莊嚴は水鳥樹林であるかと思へば其の體に彌陀佛の徳相である、これまた差別のまゝに差別を絶して居る世界であつて、その悉くが不可思議ならざるものはない、所が、其の中に於て殊に不可思議なのは、五濁の衆生が佛の他力に救はれて、如何なるものも、念佛して直に往生し成佛すると云ふことである、これは吾人差別の世界にのみ居るものに於て全く思議することを許さるゝことではないたゞ絶對の佛の世界、それは自他一如の世界、それを根柢として、建設された佛の本願の上に於てのみ許さるゝことである、それが親しく吾人の前に展開されたのが今の不可思議功德である、而もそれは御名として示されてあるから其の功德は即ち御名の功德である、此の功德の説かれてある此の經は、それが眞實である限り、一切諸佛が支持する所である、經を支持するから、其の經を信する者を支持する、これが一切諸佛所護念經である、此の經をかく呼ぶ所此の經の本質と、價值とを十二分に説明して居る、それでそれは即ち讚歎であり、同時に證誠である、故に「信すべし」の語は根柢ある眞實誠諦の力強い語である。

各自の國に於ての此の諸佛の語は、此の世界の吾人に於ては、即ちその聞く所の眞實であることを證明さるゝことであるから、釋尊はこれを説いて證誠とされたのである。

二、證誠の所由

諸佛の證誠あるのは何の爲であらうか、これは云ふまでもなく、證誠はすべて疑を斷ち信を生ぜしむる爲である、今の諸佛の證誠もまたさうであつて、偏に彌陀法を信ぜしむる爲である、それで釋尊はこれを説いて、吾人の信を求めたのである、法然上人は『小經釋』に於て、此の事を詳しく説明された、曰く

凡そ佛の所説に於て信不信の者あり、今經の所説に於てもまた信不信あり、若し前の所説の念佛往生の法に於て敬信を生じて疑なき者には何ぞ證誠を用ひん、今この六方諸佛の證誠、偏に疑惑不信の者の爲なり、疑惑の相其の類一にあらず、外道の輩は佛の教法に於て、都て之を信ぜず、況んや念佛往生の法に於てをや、又佛法の中にも小乗の人の如きは、尙ほ他方の佛土あることを信ぜず、況んや念佛往生の法をや、又大乘を學ぶ有信の者と雖、五逆十惡破戒の徒の往生に於ては、或はまた信ぜず、又疑ふ、設ひ善人と雖、如何そ具縛(三)の凡夫、僅に一日七日の念佛、一念十念の念佛の力を以て、直に三界の穢惡を離れて淨土不退の境に入らんや、凡夫往生と言ふは、或は是れ誘引の言か、或は是れ別時の意趣ならんか、今かくの如き疑惑不信の人の爲に、此の證誠あるなり、又五逆十惡の罪人自ら其の身に於て疑をなして謂く、我は是れ十惡五逆の罪人、業障年深し、設ひ念佛を修すとも、如何ぞ極樂に生るることを得ん、自ら疑て敢て往生を信ぜず、是の故に此の證あり、又疑て謂く、往生極樂には當に讀誦大乘等の種

種の勝行を以てすべし、何に由てか稱名念佛の一行にして、往生することを得んやと、是の如く疑ふが故に、此の證誠を用ゆるなり。

と、實に疑は多方面から来る、感情からも理性からも、また其の判断の標準には、今日までの多くの経験が持ち出さる、さうして疑は縦横無盡に起つて来る、此に眞に道を求むるものゝ悩みがある、併し求むるものゝ悩みは、同時に與へんとするものゝ悩みである、吾人の悩みは同時に佛の悩みである、此に於て疑多ければ多き程、信ぜしめんとする善巧の方便は多くの費さるゝ、諸佛の證誠は實にこれが爲にあつたのである。

眞宗の宗學者慧雲は宗祖親鸞の意を窺うて、證誠の所由を四義かぞへて居る、一には内人の疑惑を對治せんが爲である、佛法外の人は證誠の説をなしても信は起し得ないが、佛力に對し己に信ある佛法内の人はこれによつて彌陀法を信するのである、親鸞の和讃に

十方恒沙の諸佛は、極難信ののりをとき、五濁惡世のためにとて、證誠護念せしめたり

とあるは此意であるとし、二には悲願成就を達成せんが爲である、それは彌陀佛が四十八願中の第十七願に十方諸佛に我名を讚め稱へられんことを願はれた、其の願は成就した、其の成就があればこそ、十方諸佛は證誠するのである故に此の證誠を擧げるとは、其の願成就のことを明確にする所以である、和讃に

諸佛の護念證誠は悲願成就のゆへなれば、金剛心をえんひとは、彌陀の感恩報すべし

とあるのが此の意である、三には兼ねて聖道の證し難きを示さんが爲めである、これは正所由ではないが、かく諸佛が、證誠するのは、彌陀法以外の聖道法が至難であるから、彌陀法を勧めたのである。それ故に、そこに聖道法の至

難なることが、兼ねて示されて居る。和讃に

十方恒沙の諸佛の證誠護念のみことにて、自力の大菩提心のかなはぬほどはしりぬべし

とあるのが此の意である、四には淨土易行を反顯せんが爲めであると、それは聖道自力の法は修行すれば悟らるゝと云ふ因果の教理は信じ易いが、其の修行が頗る困難である。所が今の彌陀法は信は他力によつてと云ふ、超因果の法に對してあるから起し難い、しかしそれは他力によつて得らるゝ易行であると云ふことを反顯して居るものである。今の證誠は以て難信を顯し、以て易行を反顯して居るのである。和讃に

眞實信心うることは、末法濁世にまれなりと、恒沙の諸佛の證誠にえがたきほどをあらはせり

とあるのはこれであるとして居る、これで法然、親鸞兩聖人の見方は大體で知られやう。

所が親鸞の見方には此の經の念佛往生に隱顯二意があるとされた、さうすると、この證誠と云ふことは、その二意いづれにもかゝるか、いづれかの一方であるかと云ふ問題がある、これには眞宗の宗學者は多少意見の分れがあるが、大體に於ては證誠と云ふことは隱彰眞實に對してあることである、宗祖は證誠と云ふことは十七願成就と見られた、十七願は眞實の願であるから、眞實義に於てあることである、『教行信證』化土卷本十九丁に、隱顯の説明をさるゝに、隱の義を述べられて「良に勧め既に恒沙の勧めなれば信も亦恒沙の信なり」とある、恒沙諸佛の勧めた隱の義と見られてあることは明かである。しかし若し顯説の自力念佛のみしか見ることが得ざる者は、矢張りそれに對する證誠と見るであらう。此の經の説き方はおのづから、かくあることを豫期して居らるゝやうであつて、『教行信證』化土卷二三丁の方便眞門の義を明す下に『散善義』の「決定して彌陀經の中に十方恒沙の諸佛、一切凡夫を證勸して、決

定して生を得て深信せよ」の語が引用されてあるのは、それを認められてあつたやうである。

已上諸佛の證誠に就いての古人の説を擧げたが、これに就て、不審がない譯ではない、それは諸佛の證誠とは云へやはり釋尊の説ではないか、それでどうして證誠になるのであるかと云ふことである、つまり寶樂屋が如何に天下の名士の名を列ねても、餘り信を増さないではないかと云ふ不審である、しかしそれは凡夫不實の心を以ての邪推である、諸佛が證誠して居ると斷言するゝのは諸佛の證誠が確認されて居るものでなくしては云はれない、諸佛の存在を知るものにして、それあることが確認されなくてどうして斷言されようか、それが確認するゝことは此法が眞理であることが確認されたからである、『阿含經』には「今我かくの如き古仙人の道を得たり」と云はれてある、古仙人の道であつて一家言でない^(五)と云ふ所に佛教の特色がある、今も一切の諸佛が説く所であると斷言するゝ所に、一家言にあらざる眞理であると確定された、佛説の力強さがあるのである。

四、護念の相狀

證誠した諸佛は護念する、護念とは唐譯には攝受としてある、諸佛が此の經を信するものを其の心に攝めとり擁護して、退くことなく、進ましむるを云ふのである、其の相狀を經文に

舍利弗、汝が意に於ていかん、何が故ぞ名けて一切諸佛所護念經とする、舍利弗、若し善男子、善女人有て、是の諸佛所説の名、及び經の名を聞かんものは、是の諸の善男子、善女人、皆一切諸佛の共に護念する所となり、皆、阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得、是の故に舍利弗、汝等、皆當に我が語及び諸佛の所説を信受すべし

とある、諸佛所説の名と云ふのは諸佛が等しく稱説するゝ阿彌陀佛の名號のことであり、經の名と云ふは其の名號の利益が顯はされた、一切諸佛所護念經の名であるとする説と、前者は他方諸佛の世界に於ての經名であり、後者は此の世界の經名であるとする説とがあるが、何れにしても、此の阿彌陀佛のことであつて、それは佛の御名の功德である、これを聞くとは聞いて信じたのである、其の者は一切諸佛が護念する、護念するのは阿耨多羅三藐三菩提（佛果のこと）に於て退轉することなき、不退の利益を得、そうして彼の阿彌陀佛の淨土へ往生することを得るのである、此の往生のことは今の經文にないが次の經文にある、此の不退と往生、これが諸佛護念の利益である、併し諸佛の證誠も阿彌陀佛悲願の成就によるのであれば、此の護念もまた阿彌陀佛の願力が諸佛の上に顯はれて居るものに外ならないのである、それで暫く彌陀、諸佛を分つけれども、畢竟それは永く分つべきものではない。

五、發願往生の已今當

諸佛はかく護念せらるゝから、此經を聞き、信じて、發願するものに於ては、必ず往生する、其の相狀を經文に示して、その發願が勧められてある、即ち

舍利弗、若し人有て已に發願し、今發願し、當に發願して阿彌陀佛國に生ぜん^(一)と欲する者、是の諸の人等、皆阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得、彼の國土に於て、若は已に生じ、若は今生じ、若は當に生ぜん、是の故に舍利弗、諸の善男子、善女人、若し信すること有ん者は應當に發願して、彼の國土に生ずべし
と説かれてある、阿耨菩提を退轉しないのは、諸佛に護念せられて居るのであり、それが得らるゝ發願であるから、

其の發願は御名を聞き信じて往生せんとする發願である、故に上にさかのぼれば、阿彌陀佛を説くを聞いて執持名號した念佛の行者である、故に信心の人であり、念佛の人である、此の人は必ず往生するのである、併し信心の花の開くことは、人によつて差異がある、過去世に於て開けた人もあり、今世に於て開く人もあり、未來世に於て開く人もある、これが已今當の發願である、發願に三世があるから、往生にも隨つて三世がある、過去世に發願した人は過去世に往生し、今世に發願した人は今世に往生し、未來世に發願した人は未來世に往生するのである、かく三世の發願と往生とを詳説するのは、畢竟、此の經の利益は三世常恒不斷にあると云ふことを顯はされたのであり、また往生は順次の生にあつて、生を隔つるのでないと云ふことが示されるのである、無量壽の佛の利益は三世常恒になくはない、三世常恒に其利益があつてこそ眞實の法である、こゝにもまた眞實法の權威が顯はされてある、また、「衆生を往生させずば正覺を取らない」と發願して成佛された阿彌陀佛であるから、其の御名を信じた者は過去であれば過去、現在であれば現在、未來であれば未來、直ちに往生を得ることが、最も自然のことである、かくして往生の最も慥かさが説き示されたのである。

第九章 互相讚德

諸佛の證誠護念を説き終られた釋尊は、更に諸佛が釋尊を稱讚することを説かれた、經文にそれを

舍利弗、我今、諸佛の不可思議功德を稱讚するが如く、彼の諸佛等も亦、我が不可思議功德を稱説して、而して是の言を作さく、釋迦牟尼佛、能く甚難希有の事を爲し、能く娑婆國土、^(七)五濁惡世、劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命

濁の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に、是の一切世間難信の法を説く

と書かれてある、善導大師は此の經文に就て、「諸佛の大悲同じきことを表知せしむ、互に相、徳を讚じて心に異なく巧みに時機に應じて各功あり」と讚歎されてある、釋迦が彌陀を説く如く諸佛も説き、釋迦が諸佛を讚歎するが如く諸佛も讚歎する、これこそ大悲同じく、心に異なく、佛と佛と互に念する美しい世界を開展されたのである、自分は初めに諸佛の證誠は、證明する佛と證明さる、佛と、説く佛と説かる、佛とが全く同一の世界にあることを示したものであると云つたが、こゝまで至つて遺憾なく其の事が表明された、六方證誠の初めに於て、阿彌陀佛の不可思議功德を讚歎するが如くと云ひ、其の不可思議功德は今や、諸佛の不可思議功德と云はれ、更に釋尊自身我が不可思議功德となつて居る、こゝに於て彌陀、釋迦、諸佛の三佛が等しく不可思議功德の世界にあるものであつて、説くも説かるゝも、證するも證せらるゝも、畢竟自らが自らを説き、自らが自らを證する底の一の世界の光景が展開されて居るのである、此の世界こそ實に最高尊貴の世界である、その世界なればこそ其の儘にして、五濁惡世に出現して、其の最高の世界を顯示せんと活動して居る、これが釋尊が此の世界に出現した使命であり本懷である、即ち此の五濁惡世の衆生に對して阿彌陀佛の御名の不可思議功德を顯示し、衆生をしてまた不可思議功德の人たらしめんとするのである、かくの如く五濁に出現することは、最高の世界にある佛にあらずば能はざる難事であり、其の五濁の衆生に對して、その世界を顯示することもまたその世界にあるものでなくては不可能である、難事である、さればこそ最高の世界、不可思議功德の世界は、一切世間難信の法と稱せらるゝものであるが、釋尊はよくこれを説き、諸佛はよくこれを證し、法界は悉く、彌陀如來の無量光の世界となつて、五濁の凡夫が救はれざることを得ざることとなつて居る

のである。

已上は諸佛が釋尊を讚歎する語にあらはれた意味であるが、釋尊は其の語を其のまゝ受け入れて、自ら此の土に出現した所以が、全くこゝにあることを示された。

舍利弗、當に知るべし、我、五濁惡世に於て、此の難事を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に此の難信の法を説く、是を甚難となす

と、明らかに自己の使命をのべられた、此の難事を行ずるとは、五濁に於て成佛し、此の法を説くことであることは云ふまでもないが、それは同時に難信の法のこと、見らるゝ、難信の法は佛の不可思議功德であり、衆生の上にはあらはれては念佛三昧と云はるゝ、聞説阿彌陀佛執持名號である、釋尊これを行ずるは、その念佛三昧が自己體験の法なることを示したものである、親鸞の『唯信文意』五六丁には

釋迦牟尼如來は五濁惡世にいで、この難信の法を行じて無上涅槃にいたれりとときたまふ

と云はれてある、此の經としてはかく解してこそ、深き經意を得たものと云ふことができよう、さればこそ釋尊は此の經を説くことを以て使命とし本懐としたのである、これが説法の最後に於ての、明確なる宣言である、實に此の經法はかく力強く説かれた所に於て、眞實が明らかに見へ、道を求むるものに於て最も尊い所のものである。

第十章 末代流通

已に經説は終つて流通分となつた、經文にはそれを佛、此の經を説き已りたまふに、舍利弗、及び諸の比丘、一切

世間の天人、阿修羅等、佛の所説を聞き、歡喜信受し、禮を作して去りにき

と記述されてある、舍利弗已下、此の會座に侍つて、此の最高難信の法を聞いた者は、悉く歡喜し信受した、そうして心からなる敬禮を表して去つた、これは簡単な記述であるが、これで此の經の流通はたしかである、歡喜し信受した所に此の經典は、此の地上に眞實の意味に於て出現した、已に火は點じられたのである、其の火は次から次へ、衆生の煩惱惡業の心を焼き止さずば止まない、彼れ等は禮をなして去つた、已に火は四方に廣がつた、善導は『法事讚』下二二丁に、「世尊、説法の時將に了らんとして殷懃に彌陀の名を付屬す」と此の場合を述べられた、點火された火は彌陀の御名である、それが四方に擴がつたのが、印度、支那、日本の三國二千餘年間の淨土教が人世に於ての闇夜の光明であつたか、邪惡を焼く靈火であつたか、また現代に於てのそれであるか、かく考へるとき、末代流通は經典の文字に於てのみあることでなくて、生きた事實であつた、流通が生きた事實であることは、一經の所説が事實であることを物語つて居るものである、吾人もまた最後に當つて道に志すの士が、此の經典に於て、其の靈火に觸れ、其の光明に浴せられんことを切望する、尙ほ書くべきことは多いが、限定された紙數であるから、茲に擱筆する。

〔註〕(一) 窺基の『阿彌陀經通贊疏』下に此の二説が擧げられ、後の註釋書にこれを擧げるものが多い、元照の『同經疏』源信の

『同經略記』には同名異佛論を取り、永觀の『同經要記』には同一佛の説を取つて居る。

(二) 『源信の阿彌陀經略記』に此の二説あり。

(三) 具縛は、縛は煩惱のことであつて、煩惱を具足して居ると云ふの意。

- (四) 『阿彌陀經甲午記』下(真宗全書本一五、六頁)に出づ
- (五) 『雜阿含』第十二(辰帙六五丁)に出づ
- (六) 『阿耨多羅三藐三菩提』(Anuttara-samyak-sambodhi)は無上正偏智と譯す、眞理を観るの智慧である、故に無上であり正であり遍である智慧である、これは佛果の智慧であるから、佛果のことを云ふのである。
- (七) 五濁は世の濁れたる有様を五に教へたもの、劫濁は時の濁り、即ち次の四濁ある時、見濁は人の考への濁り煩惱濁は人貪瞋等の煩惱を起すを云ふ、衆生濁は見濁、煩惱濁の爲めに人、醜とならふとなるを云ふ、命濁は短命なるを云ふ。
- (八) 『法華讚』下二〇丁

昭和九年一月五日印刷
昭和九年一月廿日發行

日本宗教叢書
第二回配本

不許複製

東京市田區一ツ橋通町二
編譯發行 會社 東方書院
兼印刷人 代製者 三井品史

東京市小石川區久保町一〇八
印刷所 共同印刷株式會社
代製者 君島 雅

發行所 會社 東方書院
電話九段三三八四二
掛號東京六八六一二

終